那覇市文化財調査報告書第 110 集

那覇市内遺跡Ⅷ

－首里旧金城村跡－

２０１９（平成３１）年３月

那覇市

那覇市内遺跡Ⅷ

－首里旧金城村跡－

序

本書は、市内遺跡発掘調査等として国の補助を受けて 2010（平成 22）年度に実施した「首里旧金城村跡」の緊急発掘調査の成果報告です。

「首里旧金城村跡」は、首里城が所在する台地の南斜面に位置し、18 世紀初頭に描かれた『首里古地図』の「金城村」と「内金城村」を遺跡の範囲としています。

今回の調査区である「内金城村」には、国指定天然記念物の「首里金城の大アカギ」や那覇市指定有形民俗文化財の「内金城御嶽」が所在します。内金城御嶽は大嶽と小嶽の二つに分かれ、それぞれに神名が伝わっており、沖縄の年中行事のひとつで、旧暦 12 月８日に行われる鬼餅節（ムーチー）の由来がある御嶽でもあります。また、調査区周辺は、「高あむしられ」の記載が見て取れ、戦前の民俗地図では「畑」として表されています。

今回の調査成果としては、ピット、溝状遺構、耕作痕、礫集中遺構などの遺構が確認されています。確認された遺構で注目されたのは、生産遺跡に伴う耕具痕と考えられるもので、ピットや溝状遺構、礫集中遺構は、それに付随する可能性が示唆されます。

出土遺物としては、中国産陶磁器、本土産陶磁器、沖縄産陶器、円盤状製品、玉類、簪・銭貨など、多種多様な遺物が出土しています。

今後、周辺の調査成果を整理し、詳細な考察を進めることで、琉球王国時代における沖縄近世期の村跡の一端が明らかになるものと期待しています。

本報告書が、市民の皆様はもとより多くの方々に活用され、文化財保護行政の一助となれば幸いです。

末尾になりましたが、発掘調査作業ならびに、本報告書を作成するにあたってご協力いただきました関係各位に深く感謝申し上げます。

2019（平成 31）年３月

那覇市長　　城間　幹子

例　言

１．本報告書は、国（文化庁）の補助を受けて、那覇市が 2010（平成 22）年度に実施した「首里旧金城村跡緊急発掘調査」の成果を収録したものである。

２．発掘調査は、個人住宅建築に伴うもので、地権者及び建築施工業者に多大な協力を得た。

３．発掘調査及び資料整理・報告書作成では、下記の方々に協力・指導を得た。記して感謝申し上げる。

・首里金城町自治会
・松竹重機
・城間千栄子（元那覇市非常勤職員）
・泉谷塁（元那覇市非常勤職員）

４．図版１の空中写真（2009 年撮影）、第１図の那覇市全図（Ｓ＝１：50,000　平成 19 年 12 月１日発行）、第２図の那覇市全図（Ｓ＝１：25,000　平成 21 年 11 月１日発行）、第３図の１万分の１地形図　那覇（Ｓ＝１：10,000　平成 17 年４月１日発行）は、国土地理院発行のものを複製して使用した。

５．第１図に使用した広域図は、『ブリタニカ国際地図』　株式会社　ティビーエス・ブリタニカ　1991 年７月１日（第２版改訂発行）の 91 ページの部分をトレースして使用した。

６．第４図は、「都市計画図　１：2,500　平成７年 12 月修正　那覇市作成」を複写、加筆して使用した。

７．第５図は、「那覇市現況・地籍併合図　縮尺１：500　昭和 63 年 12 月　那覇市税務部資産税課」を複写、加筆して使用した。

８．第６図は、「旧首里の歴史・民俗地図」　那覇市史編集室　1978 年 12 月　縮尺１：8,500　の一部（那覇市歴史博物館所蔵）を拡大、複写、加筆して使用した。

９．第７図は、「戦前の金城町民俗地図（昭和４～10 年頃）」縮尺１/1800　1976.10.17 作成（那覇市歴史博物館所蔵）の部分を複写して使用した。

10．第８・９図は、沖縄県立図書館所蔵の「首里古地図」を部分的に複写して使用した。

11. 第 10 図は、『琉球国絵図史料集　第三集　－天保国絵図・首里古地図及び関連史料－』　沖縄県教育委員会　平成六年三月　P125　「20　内金城村」を複製・トレースして使用した。

12. 本報告書の図及び表に記した座標値は、世界測地系（第ＸＶ系）を基本とした。なお、第４・５図には、日本測地系（第ＸＶ系）を併記した。

13. 本報告書の編集・執筆は、請盛智秋・真栄城和美・山下真利子・加納立巳・樋口麻子・島弘の協力を得て、仲宗根が行った。

14. 挿図番号と写真図版の番号は一致するように配置してある。

15. 出土遺物は那覇市　市民文化部　文化財課で保管している。

目次

序

例言

第Ⅰ章 調査に至る経緯 …… 1

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境 …… 4

第Ⅲ章 調査経過と調査組織 …… 14
第1節 調査経過 …… 14
第2節 調査組織 …… 16

第Ⅳ章 層序 …… 19

第Ⅴ章 遺構 …… 20
１.ピット
２.溝状遺構
３.耕具痕
４.礫集中遺構

第Ⅵ章 遺物 …… 30
第1節 中国産青花 …… 30
第2節 本土産陶磁器 …… 31
第3節 沖縄産陶器 …… 34
１.施釉陶器 …… 34
２.無釉陶器 …… 34
３.陶質土器 …… 35
４.瓦質土器 …… 35
第4節 円盤状製品 …… 37
第5節 玉類 …… 37
第6節 金属製品 …… 37

第Ⅶ章 まとめ …… 51

報告書抄録

挿図目次

第１図　那覇市の位置と遺跡の位置 …… 2
第２図　本遺跡と那覇市内の主な村跡 …… 3
第３図　遺跡周辺の地形 …… 7
第４図　首里旧金城村跡周辺の調査区 …… 8
第５図　調査区周辺の地形 …… 9
第６図　調査区周辺の歴史・民俗地図
（首里地区）…… 10
第７図　戦前の金城町民俗地図 …… 11
第８図　首里古地図（部分）…… 12
第９図　首里古地図（部分拡大）…… 12
第10図　内金城村（首里古地図）…… 13
第11図　遺跡の層序 …… 21
第12図　調査区平面図 …… 23
第13図　円盤状製品素材別出土状況 …… 40
第14図　中国産青花 …… 42
第15図　本土産磁器・染付・白磁 …… 43
第16図　本土産陶器 …… 44
第17図　沖縄産施釉陶器 …… 45
第18図　沖縄産無釉陶器① …… 46
第19図　沖縄産無釉陶器②・陶質土器 …… 47
第20図　瓦質土器 …… 48
第21図　円盤状製品 …… 49
第22図　玉類　金属製品 …… 50

挿表目次

第１表　調査工程 …… 14
第２表　ドット遺物一覧 …… 25
第３表　ピット計測一覧 …… 27
第４表　遺物出土一覧 …… 29
第５表　中国産青花観察一覧 …… 30
第６表　本土産磁器・
染付・白磁観察一覧 …… 32
第７表　本土産陶器観察一覧 …… 33
第８表　沖縄産施釉陶器観察一覧 …… 35
第９表　沖縄産無釉陶器・陶質土器・
瓦質土器観察一覧 …… 36
第10表　円盤状製品計測一覧 …… 38
第11表　円盤状製品観察一覧 …… 39
第12表　円盤状製品素材別出土一覧 …… 40
第13表　玉類・金属製品観察一覧 …… 41
第14表　銭貨計測一覧 …… 41

図版目次

図版１　遺跡一帯の空中写真
図版２　調査区の遠景と近隣
（首里金城町石畳道）の状況
図版３　表土剝ぎ作業の状況
図版４　調査状況と調査区全景
図版５　図面作成作業状況
図版６　K－９・10グリッド
図版７　K－11グリッド
図版８　L－９・10グリッド
図版９　L－11グリッド
図版10　中国産青花
図版11　本土産磁器・染付・白磁
図版12　本土産陶器
図版13　沖縄産施釉陶器
図版14　沖縄産無釉陶器①
図版15　沖縄産無釉陶器②　陶質土器
瓦質土器
図版16　円盤状製品
図版17　玉類　金属製品

第Ⅰ章　調査に至る経緯

今回の調査は、那覇市首里金城町３丁目地内における個人住宅建築に伴って実施されたものである。

那覇市が国（文化庁）の補助を受けて、2010 年度（平成 22 年度）に記録保存のための発掘調査を実施した。

本調査地区は、平成 22 年１月 19 日付け、那覇市教育委員会教育長あて「埋蔵文化財事前審査願」が提出されたことが調査の契機であった。

「埋蔵文化財事前審査願」の提出に伴い、同地域が「首里古地図」などに描かれた集落にあたり、またその周辺においても、幾つかの発掘調査事例があったことなどを踏まえ、平成 22 年３月 19 日～３月 29 日までの期間で試掘調査が那覇市教育委員会文化財課にて実施された。

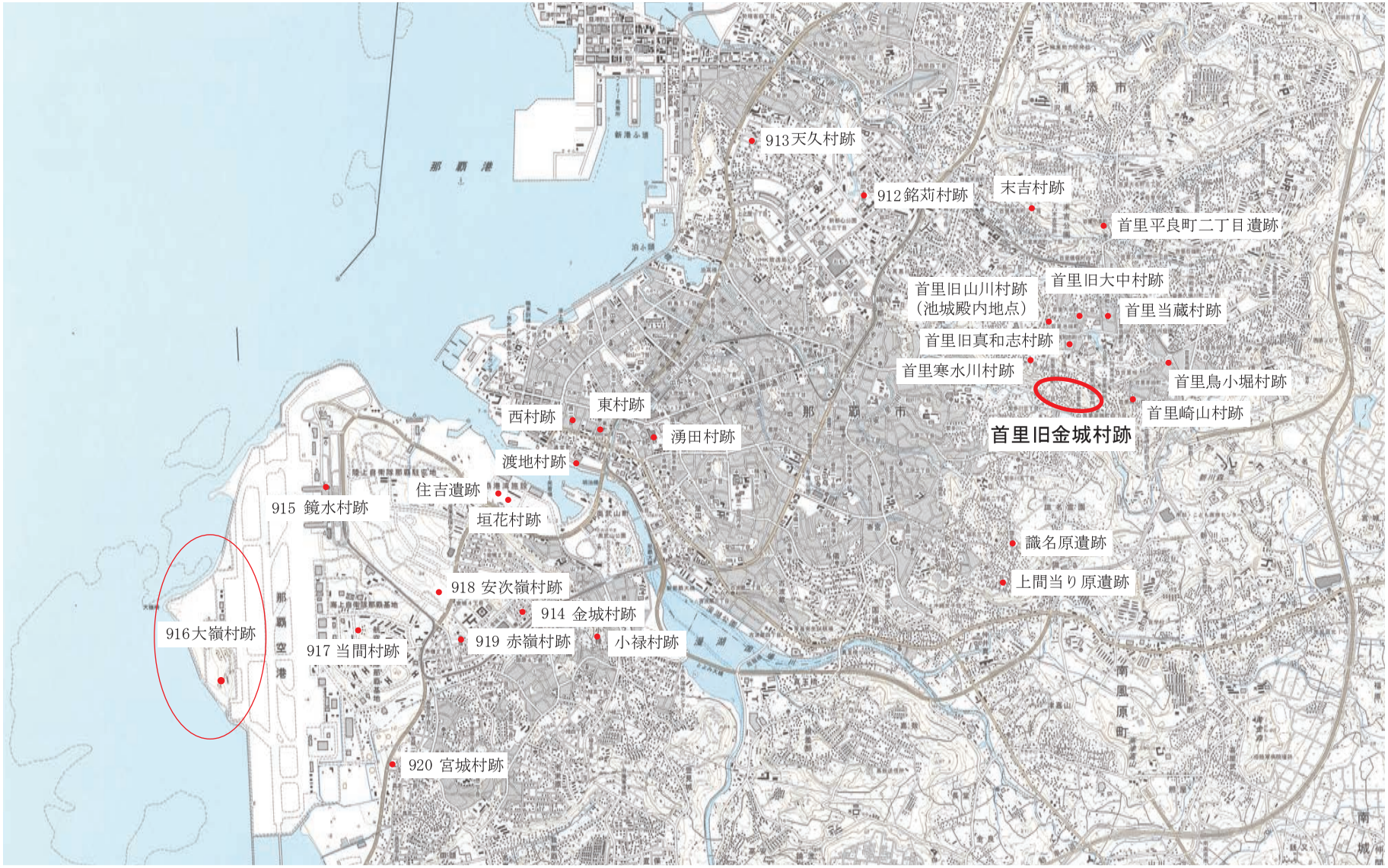
試掘調査（申請敷地内の５地点）の結果、遺物包含層（黒色土）の堆積が確認され、地山上（赤土：島尻マージ）には、ピット状の遺構を確認、さらに近世期の遺物が若干得られたことから平成 22 年４月１日付け、那覇市教育委員会教育長より地権者あてに、「遺跡あり」（申請地内には、埋蔵文化財が包蔵されていますので、保存のための調整が必要です。）と回答された（平成 22 年４月１日付け　埋蔵文化財事前審査報告書）。

その後、遺跡の取り扱いについて、那覇市教育委員会文化財課と、地権者及び建築設計・施工業者等との間で調整が行われた。調整の中で、建築工事の基礎の深さは約 70 ㎝（地山直上程度）、梁部分の掘削は控えたい等の意見が出された。その結果、遺跡の一部（地山確認遺構）の保存は可能であるが、同地に堆積する遺物包含層の保存は困難な状況となった。そのため、記録保存の処置を講じるための本発掘調査を実施する結論に至った（平成 22 年４月 12 日～４月 23 日）。

なお、文化財保護法の手続きは下記のとおりである。

・平成 22 年４月２日付け、地権者より
　「埋蔵文化財発掘の通知」について（文化財保護法第 93 条第１項）
・平成 22 年４月５日付け、市教育長より県教育庁あて進達
　「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」
・平成 22 年４月６日付け、県教育庁から地権者・市教育長あて
　「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」
　「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（回答）」
・平成 22 年４月９日付け、市教育長から地権者あて
　「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（送付）」
　「発掘調査承諾書について（依頼）」
・平成 22 年４月９日付け、地権者から市教育長あて
　「発掘調査承諾書」
・平成 22 年４月 13 日付け、市教育長から県教育長あて
　「埋蔵文化財発掘調査について（着手報告）」

第１図　那覇市の位置と遺跡の位置



第２図　本遺跡と那覇市内の主な村跡

（S＝1:5,000）

・平成 22 年４月 28 日付け、市文化財課長から県文化課長あて
「埋蔵文化財発掘調査の終了について（報告）」
・平成 22 年４月 28 日付け、市教育長から那覇警察署長・県教育長あて
「埋蔵文化財発見届について」
「埋蔵文化財保管証の提出について」

【参考文献】

『首里古地図』　沖縄県立図書館　所蔵
『開発調整マップ』　那覇市教育委員会　文化財分布図（1998 年３月版）

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

「首里旧金城村跡」は、沖縄県那覇市首里金城町２・３丁目付近を遺跡の範囲としている。

那覇市の位置について那覇市のホームページによると、「沖縄県は、北緯 24～28 度、東経 122～133 度の南北約 400 ㎞、東西約 1,000 ㎞の海上に弧を描いて連なる 160 の島しょの内、有人島 39 からなっています。その中で那覇市は最大の島、沖縄本島南部に位置します。また、本市は鹿児島と台北のほとんど中間にあり、那覇を中心とする 1,500 ㎞の円周域には、東京、ピョンヤン、香港、ソウル、北京、マニラなどの主要な都市があり、交通通信機能の上からも東南アジアの各都市を結ぶ要衝の地点であり、わが国の南の玄関として地理的に好条件の位置にあります。」と紹介されている（第１図）。

市域は、東西 10 ㎞、南北８㎞の面積 39.57ｋ㎡（推計）を測り、北側に浦添市、東側に西原町、南東側に南風原町、南側に豊見城市が接している。人口は、322,578 人（2018（平成 30）年 10 月末現在）である。

地形は、旧市内を中心とする中央部において、ほぼ平坦面をなし、北側に天久台地、東側に首里台地、南東側に識名台地、南側に小禄台地等の丘陵・台地地帯がその周辺を取り囲む。その丘陵・台地地帯を源流とする河川が市内を東から流れて東シナ海に注ぐ。市の北側から安謝川、安里川、国場川が西流し、その間に、久茂地川やガーブ川などが流れる。

地質は、島尻層（第三紀中新世）、琉球石灰岩（第三紀新世から第四紀洪積世）、沖積層などの堆積が見られる。その分布状況は、旧市街地及び首里から天久、安謝における一帯、並びに識名方面で琉球石灰岩が露頭し、その他の地域の地表面は島尻層からなっている。旧市内の低地では、海浜堆積物が見られる。

市内の主な村跡を『那覇市歴史地図』・『開発調整マップ』、各発掘調査報告書、現地説明会資料などを参考に第２図に示した。多数所在する村跡の中で、首里旧金城村跡は、那覇市において壺屋地域に続く早期から、個人住宅建築等に伴う発掘調査が実施された地域でもある。

さて、「首里旧金城村跡」は、那覇市の中央東側に位置する。標高約 91.1ｍから 19.6ｍにかけての崖地形に位置し、首里台地の南斜面に所在する。「首里城」が所在する首里台地と識名台地の間には、国指定史跡・名勝の「弁之御嶽」を源流とする安里川（金城川）が西流する。首里城（守礼門）から金城橋が架かる道筋には、琉球王府時代の主要道路である真珠道（＝首里金城町石畳道：沖縄県指定

史跡・名勝）が南北に走る（第３・４図）。首里城から那覇港（屋良座森グスク）へと続く「真珠道」について、真玉道の建設及び真玉橋架設の由来を記した『真珠湊碑文（1522（尚真 46）年）』によると、（ま玉ミなとの、ミちつくり、はしわたし申候時のひのもん）と記されている。首里城守礼門を起点として、金城・識名を経て真玉湊（那覇港）に至る石畳道で、国王頌徳碑（石門之東之碑文）には、この道路及び橋は、一般の交通の利便に供するほか、国土防衛のため王命により建設されたものと記されている（『沖縄大百科事典』）。

また、本遺跡周辺は、不透水層である島尻層（クチャ）に琉球石灰岩が不整合で堆積していることから、その間層から水が湧き出す。このことから遺跡周辺には、多くの湧泉が所在する水資源が豊かな地域でもある。本遺跡の所在地は、上述のとおり、首里金城町３丁目地内の住宅地にある（第４・５図）。首里旧金城村跡周辺の史跡・歴史的地名、戦前の金城町民俗地図を第６・７図に示す。参考頂きたい。

本調査区は、18 世紀初頭に作成されたと考えられる『首里古地図』によれば、「内金城村」として描かれている（第８・９・10 図）。同村は、屋敷（名）や寺院（大日寺・大慈院）の他に御嶽（内金城御嶽）が描かれ、今回の調査区には、「高あむしられ」の文字が表記されている。

内金城御嶽は、琉球王府時代から拝所として重要な役割を担っていたとされる。大嶽と小嶽の二つに分かれ、神名は大嶽が「カネノ御イベ」、小嶽は「イベヅカサ御セジ」とされる（『琉球國由来記』）。かつては、真壁大阿母志良礼が仕えていたとされる。なお、小嶽は、旧暦 12 月 8 日の鬼餅節（ムーチー）の由来が伝わる（『那覇市の文化財』）。これらの御嶽及び拝殿、参道は、上記の「首里古地図」でも確認できる。

【参考文献】

「那覇市　位置・面積」　那覇市ホームページ

『平成 30 年度　那覇市の教育』　那覇市教育委員会　平成 30 年８月

『平成 30 年度　市政概要』　那覇市議会事務局　平成 30 年９月

『平成 30 年度版　那覇市の環境（平成 29 年度次報告）』　那覇市　環境部環境政策課　平成 30 年 10 月

『広報　なは　市民の友　第 815 号』　那覇市　2018 年（平成 30 年）12 月

『那覇市歴史地図－文化遺産悉皆調査報告書－』　那覇市教育委員会文化課　1986 年 3 月 31 日

『開発調整マップ』　那覇市教育委員会文化課　文化財分布図（1998 年３月版）

那覇市文化財調査報告書　第 45 集　『安謝東原南遺跡　旧天久村古井戸遺跡』　那覇市教育委員会　2000 年３月

平成 30 年度　末吉村跡発掘調査現地説明会（資料）　2018.11.10　那覇市文化財課

那覇市文化財調査報告書　第 56 集　『首里旧山川村跡（池城殿内地点）』那覇市教育委員会　2002 年 11 月

那覇市文化財調査報告書　第 104 集　『首里当蔵旧水路』　那覇市　文化財課　2017（平成 29）年２月

平成 29 年度　首里当蔵旧水路・首里城公園中城御殿跡　発掘調査現地説明会（資料）

沖縄県埋蔵文化財センター　平成 29（2017）年 12 月 23 日（土）

那覇市文化財調査報告書　第 68 集　『首里旧真和志村跡（首里真和志村跡　首里旧金城村跡）』

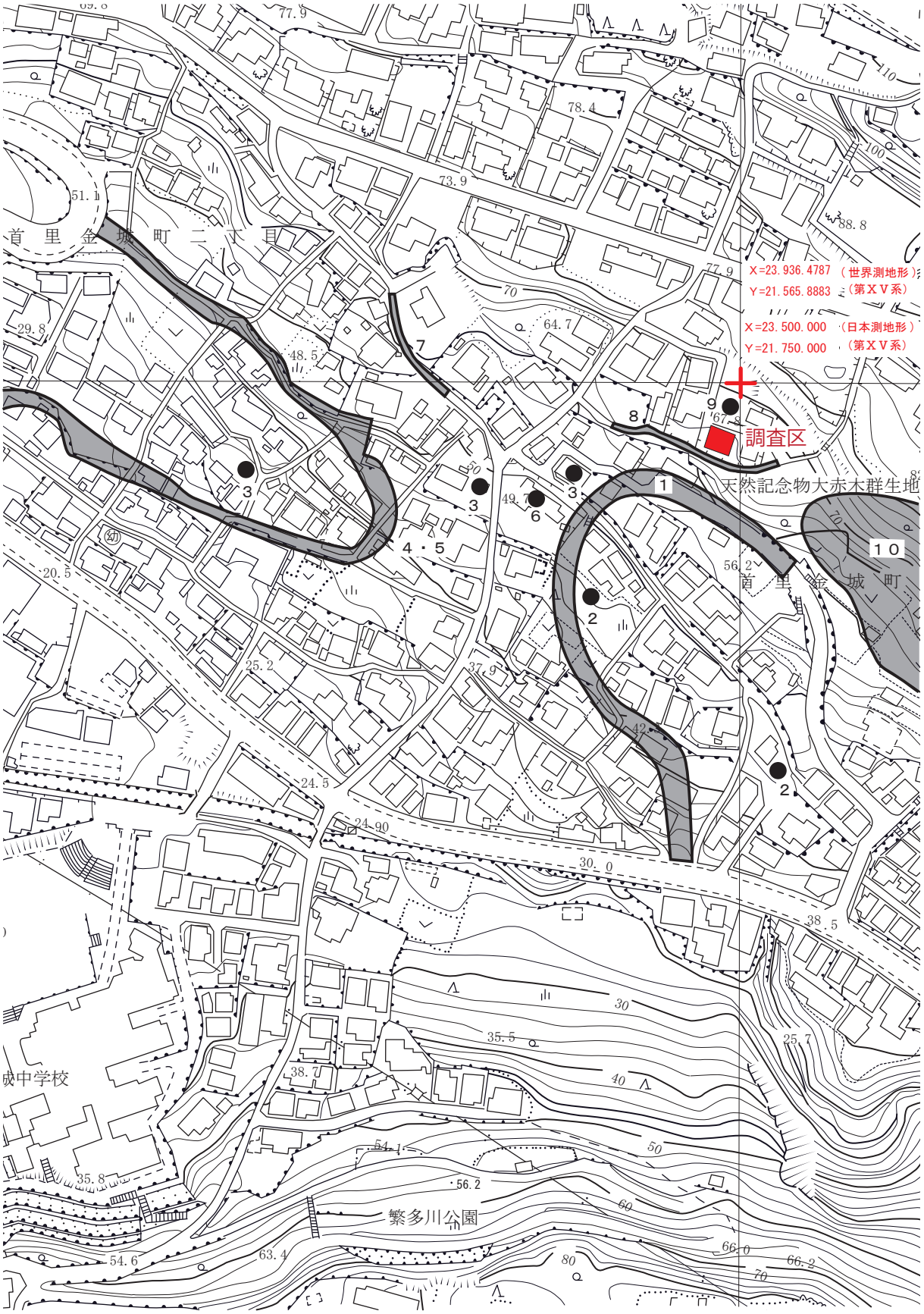
那覇市教育委員会　2005 年３月

那覇市文化財調査報告書　第 46 集　『首里旧金城村跡』　那覇市教育委員会　2000 年３月

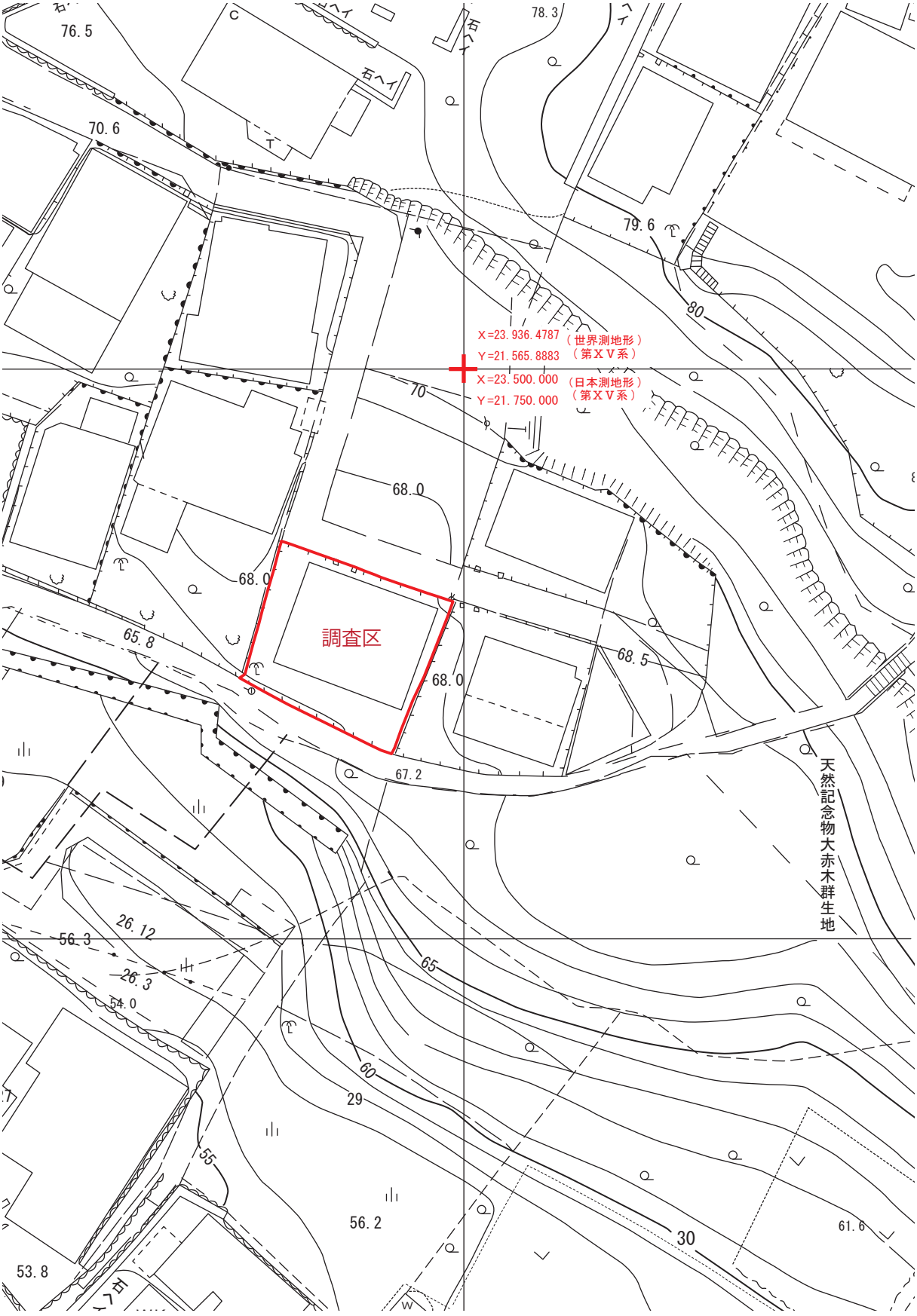
那覇市文化財調査報告書　第 48 集　『首里旧金城村跡』　那覇市教育委員会　2001 年３月
『首里旧金城村跡』　那覇市教育委員会　2007 年５月
那覇市文化財調査報告書　第 81 集　『首里旧金城村跡』　那覇市教育委員会　2010 年２月
那覇市文化財調査報告書　第 80 集　『那覇市内遺跡Ⅱ　（首里金城村跡）』　那覇市教育委員会　2009 年３月
那覇市文化財調査報告書　第 82 集　『那覇市内遺跡Ⅲ　－首里旧金城村跡－　－首里旧真和志村跡－』　那覇市教育委員会
2010 年３月
那覇市文化財調査報告書　第 106 集　『那覇市内遺跡Ⅶ　－首里旧金城村跡－　－御茶屋御殿－』　那覇市　2018 年２月
那覇市文化財調査報告書　第 49 集　『識名原遺跡』　那覇市教育委員会　2001 年３月
那覇市文化財調査報告書　第 74 集　『那覇市内遺跡Ⅰ　（識名原遺跡　首里旧大中村跡）』　那覇市教育委員会　2007 年３月
那覇市文化財調査報告書　第 86 集　『那覇市内遺跡Ⅳ
－壺屋古窯群－　－小禄村跡－　－識名原遺跡－　－伍徳院・万松院－』　那覇市教育委員会　2011 年３月
那覇市文化財調査報告書　第 102 集　『那覇市内遺跡Ⅵ　－首里崎山村跡－』　那覇市　文化財課　2015 年３月
那覇市文化財調査報告書　第 96 集　『湧田村跡』　那覇市教育委員会　2013 年３月
那覇市文化財調査報告書　第 99 集　『東村跡』　那覇市　平成 28（2016）年４月
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第 92 集　『東村跡』　沖縄県立埋蔵文化財センター　平成 29（2017）年３月
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第 46 集　『渡地村跡』　沖縄県立埋蔵文化財センター　平成 19（2007）年７月
那覇市文化財調査報告書　第 91 集　『渡地村跡』　那覇市教育委員会　平成 24（2012）年３月
那覇市文化財調査報告書　第 71 集　『住吉遺跡』　那覇市教育委員会　2006 年３月
那覇市文化財調査報告書　第 78 集　『垣花村跡』　那覇市教育委員会　2009 年２月
那覇市文化財調査報告書　第 88 集　『垣花村跡』　那覇市教育委員会　2011 年３月
那覇市文化財調査報告書　第 24 集　『尻川原遺跡』　那覇市教育委員会　1993 年３月
那覇市文化財調査報告書　第 97 集　『小禄村跡』　那覇市　文化財課　2014（平成 26）年２月
那覇市文化財調査報告書　第 89 集　『大嶺村跡』　那覇市教育委員会　2012（平成 24）年３月
那覇市文化財調査報告書　第 92 集　『那覇空港内大嶺地区　埋蔵文化財分布調査報告』
那覇市教育委員会　2012（平成 24）年３月
那覇市文化財調査報告書　第 107 集　『那覇市大嶺海岸の石切場等跡』　那覇市　2018（平成 30）年３月
大嶺村跡発掘調査　現地説明会（資料）　沖縄県立埋蔵文化財センター　平成 28 年６月 16 日

『沖縄大百科事典　下巻』　沖縄タイムス社　1983 年５月 30 日発行
沖縄県文化財調査報告書第 69 集　『金石文　－歴史資料調査報告書Ⅴ－』　沖縄県教育委員会　昭和 60 年３月 31 日
『那覇市の史跡・旧跡ガイドブック』　那覇市歴史博物館　編　2014（平成 26）年３月 15 日
「旧首里の歴史・民俗地図」　縮尺 1/8,500　1978 年 12 月　那覇市歴史博物館　所蔵
「戦前の金城町民俗地図（昭和４～10 年頃）」　縮尺 1/1800　1976. 10 月　那覇市歴史博物館　所蔵
『首里古地図』　沖縄県立図書館　所蔵
『琉球国絵図史料集　第三集　－天保国絵図・首里古地図及び関連史料－』　沖縄県教育委員会　平成六年三月
『那覇市の文化財　平成 18 年度』　那覇市教育委員会　平成 19 年３月
『角川日本地名大辞典　47　沖縄県』　角川日本地名大辞典編纂委員会　昭和 61 年７月８日
『日本歴史地名大系第四八巻　沖縄県の地名』　株式会社　平凡社　2002 年 12 月 10 日

第３図　遺跡周辺の地形　　（S=1:10,000）



第４図　首里旧金城村跡周辺の調査区（調査区の数字は第Ⅶ章参考文献の番号に対応）　（S=1:2,500）

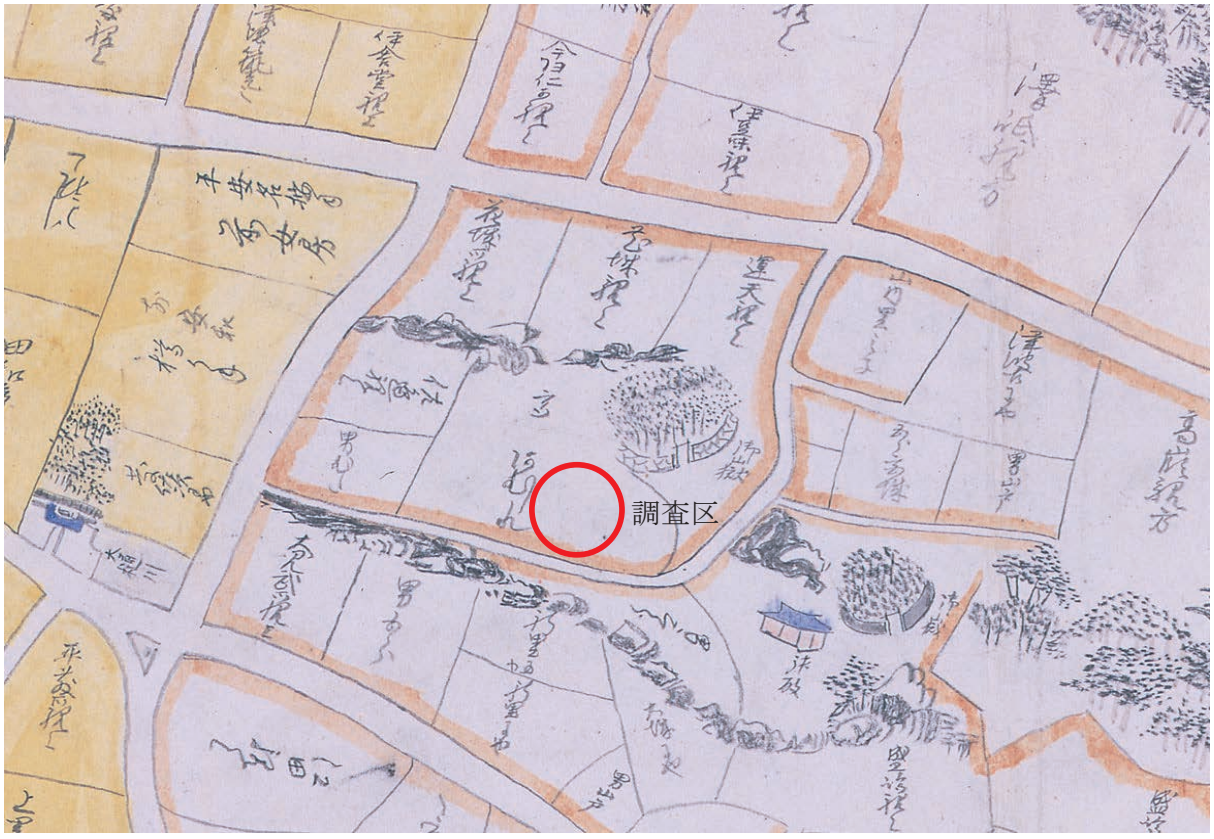


第５図　調査区周辺の地形　　(S=1:500)

第６図　調査区周辺の歴史・民俗地図（首里地区）

第７図　戦前の金城町民俗地図

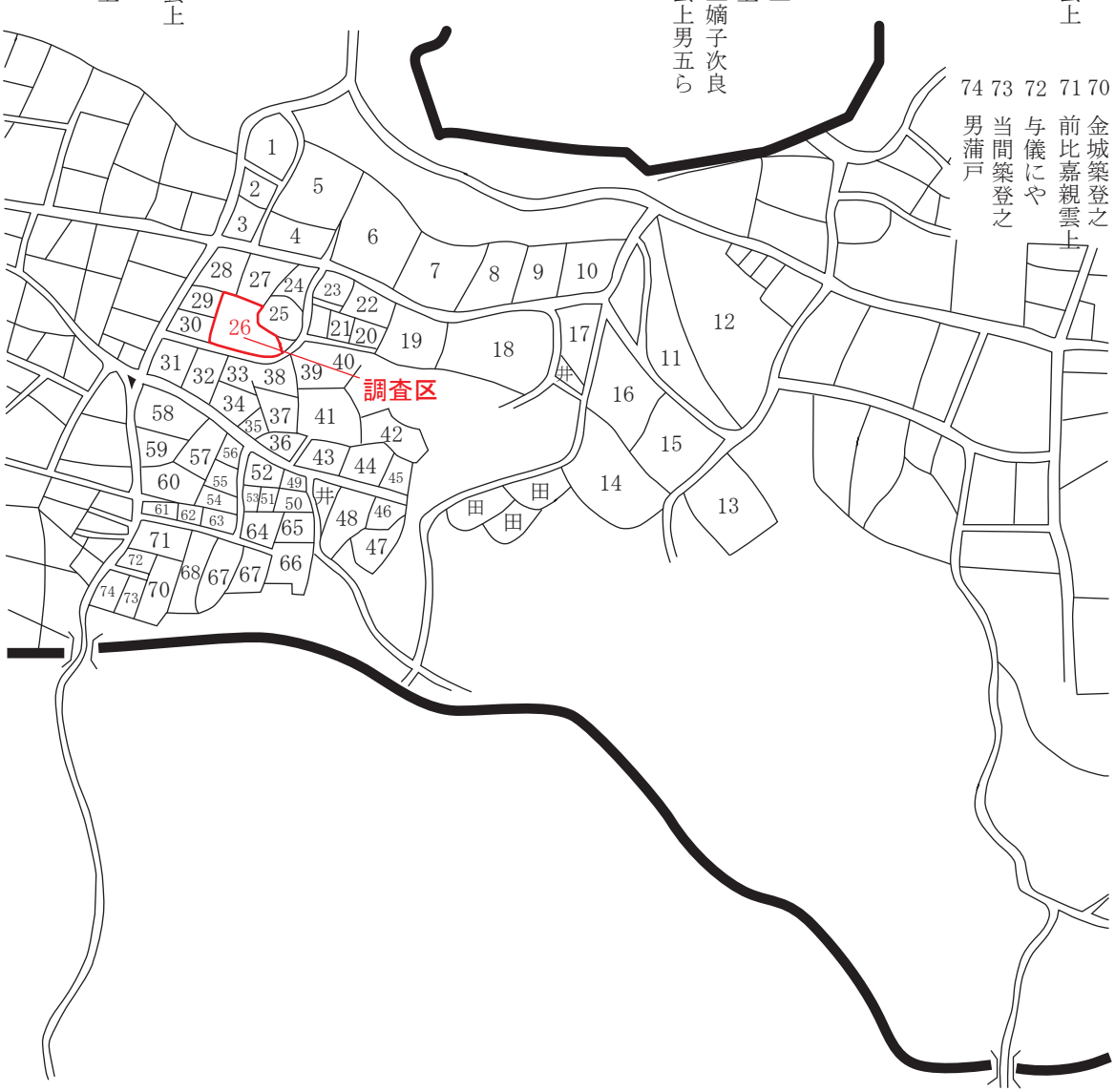
第８図　首里古地図（部分）　（沖縄県立図書館所蔵）



第９図　首里古地図（部分拡大）　（沖縄県立図書館所蔵）

内金城村

1 前安座間親雲上男加那
2 与那城築登之親雲上
3 今帰仁里之子親雲上
4 伊豆味親雲上
5 牧志築登之親雲上
6 沢岻親方
7 平安座里主
8 伊地親雲上
9 長堂築登之親雲上
10 知念築登之親雲上
11 前又吉親雲上
12 崎山御嶽
13 男とく
14 大慈院
15 安里にや
16 池原親雲上
17 高安子
18 大日寺
19 高嶺親方
20 男山戸
21 五ら宮城
22 津波古にや
23 山内里之子
24 運天親雲上
25 御嶽
26 高あむしられ
27 花城親雲上
28 花城築登之親雲上
29 佐辺親雲上
30 男むた
31 大見武築登之親雲上
32 男五ら
33 新里にや
34 新里にや
35 男山戸
36 与那嶺築登之親雲上
37 大城にや
38 男三ら
39 拝殿
40 御嶽
41 盛島親雲上
42 盛島親方
43 喜瀬築登親雲上
44 古波蔵子
45 当間築登之親雲上
46 前原築登之親雲上
47 西平築登之親雲上嫡子次良
48 前屋宜築登之親雲上男五ら
49 比嘉築登之
50 古波蔵掟親雲上
51 新里にや
52 宮城掟親雲上
53 金城にや
54 男屋□
55 比嘉築登之樽
56 金城築登之
57 比屋根築登之
58 江田親雲上
59 男加那
60 比嘉築登之
61 □□□□□
62 □□□後家
63 奥川築登之
64 安富祖築登之親雲上
65 安里にや
66 親泊築登之親雲上
67 座波子
68 玉城にや
69 玉城親雲上
70 金城築登之
71 前比嘉親雲上
72 与儀にや
73 当間築登之
74 男蒲戸



第 10 図　内金城村（首里古地図）

第Ⅲ章　調査経過と調査組織

第１節　調査経過

本調査は、第Ⅰ章でも述べたとおり、2010（平成 22）年４月 12 日～2010（平成 22）年４月 23 日の期間で実施された。なお、資料整理作業は、2014（平成 26）年度から開始し、2017（平成 29）年度まで断続的に行い、報告書作成作業は、2018（平成 30）年度に実施した（第１表）。

調査では、地権者及び建築設計・施工業者、首里金城町自治会等からの多大な協力を得た。

さて、本遺跡の調査は、「首里旧金城村跡」における遺物包含層の掘削を主な目的とした。第Ⅰ章で述べたとおり、地山面で確認された遺構は、建築物の基礎の下に現状保存することができたため、いくつかのピットを半裁するのみの調査を計画した。

まず、発掘調査の事前準備として、バックホーによる表土剝ぎ作業について施工会社との調整・打ち合わせを平成 22 年４月７日（水）に行った。表土剝ぎ作業における注意事項を確認した後、建物梁部分以外に６つのグリッドを設け、施工業者の協力のもと、表土の掘削作業を行った。

人力による掘削作業は、平成 22 年４月 12 日（月）から開始した。

発掘調査は、敷地内に４ｍ×４ｍの調査グリッドを設定した。調査グリッドは、北から南にアルファベット（Ｋ・Ｌ）、西から東に算用数字（９・10・11）を付した。その呼称は、北東の交点を基軸として「Ｋ－９、Ｌ－10・・・」とした。

第１表　調査工程

年度／工程	２００９年度（平成21年度）	２０１０年度（平成22年度）	２０１４年度～２０１７年度（平成２６年度～平成２９年度）	２０１８年度（平成30年度）
試掘調査	→			
発掘調査		→		
資料整理			→	
報告書作成				→

以下、調査概要を業務日誌より略記する。

2010（平成 22）年４月

12 日（月）くもり

調査区の全体清掃を開始。現地調査（人力掘削作業）を開始する。

４ｍ×４ｍのグリッドを設定した後、各グリッド（Ｋ－11、Ｌ－11、Ｋ－９・10）の掘り下げ作業を開始。出土遺物は青磁等も見られるものの小片が多数を占める。

13 日（火）くもり

各グリッド掘り下げ作業。第①層の 50 ㎝程で、地山（赤土）が確認できそうな状況。

14 日（水）くもり

各グリッド壁面の精査作業を行う。Ｋ・Ｌ－11 グリッドでは、地山面に溝状遺構やピット、鍬跡（耕作痕）などが確認できる。

15 日（木）雨時々くもり

雨天のため、出土遺物の洗浄作業及び発掘調査用具の追加準備を行う。

16 日（金）くもり時々小雨

Ｌ－９・10 グリッドの掘り下げ終了（第①層 40/60）。Ｋ－９・10 グリッドで確認された礫集中部の精査作業を行う。各グリッド壁面の断面図作成。

19 日（月）くもり

Ｌ－10 グリッドで確認されたピット（№.１～６）の半裁作業を実施。各グリッドの遺構平面図作成を開始する。

20 日（火）小雨後くもり

各グリッド遺構確認面の精査作業を行う。遺構ラインの確認。各グリッド出土遺物のレベリングを行った後、取り上げ作業を実施。

21 日（水）くもり後晴れ

遺構図面の確認及び写真撮影作業を行う。

22 日（木）晴れ

各グリッド杭の測量作業（座標点設置のための測角・測距作業）を実施。Ｋ－９・10 グリッド確認遺構の写真撮影を行った後、調査区の埋戻し作業を開始する。

23 日（金）くもり時々小雨

調査区内及び周辺の清掃作業及び発掘調査用具の整理を行う。本日にて発掘調査をすべて終了し、現地撤収を行った。

第２節　調査組織

本遺跡の調査組織は以下のとおりである。

（1）調査組織（発掘調査：平成 22 年度）

事業主体	那覇市教育委員会	教　育　長	城間　　幹子
事業所管	文化財課	課　　長	古塚　　達朗
調査総括	文化財課	副　参　事	島　　弘
調査事務	文化財課	副　参　事	島　　弘
	〃	主　　幹	内間　　靖
	〃	主任主事	仲宗根　　健
	〃	主　　事	宮城　　奈里（臨時職員）
調査担当	文化財課	副　参　事	島　　弘
	〃	主　　幹	内間　　靖
	〃	専門員主査	玉城　　安明
	〃	〃	北條　　真子
	〃	主任専門員	仲宗根　　啓
	〃	〃	樋口　　麻子
	〃	〃	當銘　　由嗣
	〃	専　門　員	知念　　政樹
	〃	臨時職員	上江洲　由昇（発掘調査作業員）
	〃	〃	翁長　しのぶ（　〃　）
	〃	〃	仲西　美那子（　〃　）
	〃	〃	宮良　　知子（　〃　）

（2）調査組織（資料整理：平成 26～30 年度）

事業主体	那覇市	市　長	翁長　雄志	（平成 26 年度）
		市　長	城間　幹子	（平成 26～30 年度）
	市民文化部	部　長	島田　聡子	（平成 26・27 年度）
	〃	部　長	玉寄　隆雄	（平成 28 年度）
	〃	部　長	徳盛　仁	（平成 29・30 年度）
	〃	副部長	玉寄　隆雄	（平成 26～27 年度）
	〃	副部長	渡慶次　一司	（平成 28～30 年度）
事業所管	文化財課	課　長	古塚　達朗	（平成 26・27 年度）
	〃	課　長	岸本　修	（平成 28・29 年度）
	〃	課　長	末吉　正睦	（平成 30 年度）
調査総括	文化財課	副参事	島　弘	（平成 26～29 年度）
	〃	副参事	内間　靖	（平成 30 年度）
調査事務	文化財課	副参事	島　弘	（平成 26～29 年度）
	〃	副参事	内間　靖	（平成 30 年度）
	〃	主　幹	内間　靖	（平成 26～29 年度）
	〃	主　査	新里　清美	（平成 26・27 年度）
	〃	主　査	神谷　あけみ	（平成 28～30 年度）
	〃	主任主事	瑞慶山由香里	（平成 26 年度）
	〃	主　事	高嶺　朝美	（平成 27～29 年度）
調査担当	文化財課（埋文Ｇ）	副参事	島　弘	（～29 年度）
	〃	〃	内間　靖	（平成 30 年度）
	〃	専門員主査	仲宗根　啓	
	〃	〃	樋口　麻子	
	〃	主任専門員	當銘　由嗣	
	〃	主任主事	島　弘	
	〃	主任学芸員	吉田　健太	
	〃	学　芸　員	天久　瑞香	
	〃	非常勤専門員	長濱　愛梨	（平成 26～28 年度
	〃	〃	城間　千栄子	（平成 26 年度）
	〃	〃	玉城　真紀子	（平成 28 年度）
	〃	〃	牧村　美緒	（平成 28 年度）
	〃	〃	阿部　直子	（平成 29 年度）

〃	〃	髙良	夏枝（平成 29・30 年度）
〃	〃	名嘉山	美野（平成 30 年度）
〃	（開調G）主　幹	玉城	安明
〃	主任学芸員	安斎	真知子
〃	学　芸　員	江上	輝
〃	非常勤専門員	徳元	剛（平成 27～30 年度）
〃	〃	砂川	暁洸（平成 29 年度）
〃	〃	渡辺	幸夫（平成 29・30 年度）
〃	〃	山道	峻（平成 30 年度）

非常勤職員（資料整理作業）

（平成 26 年度）

城間千栄子　真栄城和美　山下美也子　宮良知子

（平成 27 年度）

真栄城和美　請盛智秋　山下美也子　山下真利子　高良夏枝　新垣成子　加納立巳

（平成 28 年度）

真栄城和美　請盛智秋　山下真利子

（平成 29 年度）

請盛智秋

第Ⅳ章　層序

今回の調査の層序は、大きく四枚に大別した（第 11 図）。最上部は、表土層。次に第①層上部。その下層に第①層。最下層は地山（赤土：島尻マージ）。

暗褐色及び一部黒色を呈する第①層を遺跡の遺物包含層とした。

第①層は､厚 20 ㎝程度で出土遺物は中国産青花から本土産近代磁器までが層序内で一括して得られる状況であった。

一部出土遺物については、その出土状況を座標値（平板実測図から図上計算）及び標高を記録して取り上げた（第 12 図　第２表）参照。

なお、色調は土色帖を参考に観察した。以下に、層序の概略を記す。

表土層

既存建物による攪乱が見られる。暗褐色（10 暗褐 YR3/3）を呈する。層厚は 20～40 ㎝。

第①層上部

表層と第①層の間層。暗褐色（10 暗褐 YR3/4）を呈する。層厚は約 10 ㎝前後。

第①層

遺物包含層。全体としては、暗褐色（10YR 暗褐 3/3）を呈する層相であった。一部に黒色（7.5YR 黒 2/1）を呈する土層も確認できた。中国産・本土産陶磁器や沖縄産陶器・近代磁器などを含む。しまりには若干欠ける。層厚は約 20 ㎝前後。

地山層

赤土（島尻マージ）。上部で明褐色（7.5KR 明褐 5/8　地山①）を呈する移行層が見られた。全体としては、黄褐色（7.5YR 黄褐 7/8　地山②）や橙色（7.5YR 橙 6/8・2.5YR 橙 6/8　地山③）など幾つかの色調が観察された。

第Ⅴ章　遺構

今回の調査で確認された遺構は、ピット・溝状遺構・耕具痕（鍬跡・耕作痕）・礫集中遺構であった。（第12図　図版６～９）。

標高約67mの地山直上付近で遺構が確認されている。調査区の北東側（標高約67.3m）から南西側（標高約67.0m）にかけて若干の傾斜を持つ。

各遺構の特徴等を以下に略記する。

1. ピット

Ｋ－10グリッドで６基、Ｌ－９グリッドで１基、Ｌ－10グリッドで６基、Ｌ－11グリッドで１基のピットを半裁した。

平面形は、主に円形あるいは楕円形を呈するものが多くを占める。大きさは、直径20㎝弱から50㎝弱までのものがある。深さは、50㎝を超すものから10㎝未満のものまで多様である。

出土遺物は、沖縄産陶器が多数を占めるほか、中国産青磁・青花等も得られている。また各ピット内の覆土をサンプリングしている。

ピットの計測一覧を第３表に示した。参照されたい。

2. 溝状遺構

Ｌ－11・10・９グリッドにおいて、東西に延びる溝状遺構を確認した。遺構確認面での観察では、調査区の地形と同様に東側から西側へ若干の傾斜をもつようである。また、調査区南西側（Ｌ－９・10グリッド）で、南側に折れる状況を呈していた。限られた調査範囲であったため判然としないものの、南側の崖地に延びる様相が想起される。

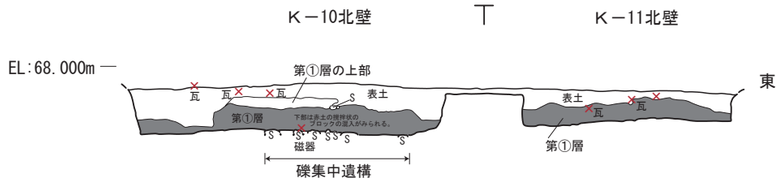
3. 耕具痕（鍬跡・耕作痕）

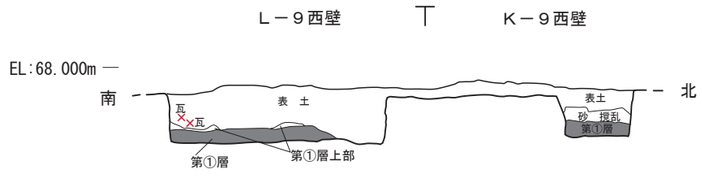
調査区全体に、耕具痕（鍬跡・耕作痕）と考えられる遺構が確認された。平面形が略三角形となるものが代表的なものである。また、不定形なピット状になるもののなかにも、シャープなラインが見られるものがあることから、鍬跡（耕作痕）を想起させた。Ｌ－11グリッドの溝状遺構の周辺においては、特にその確認事例が顕著であった（図版９）。

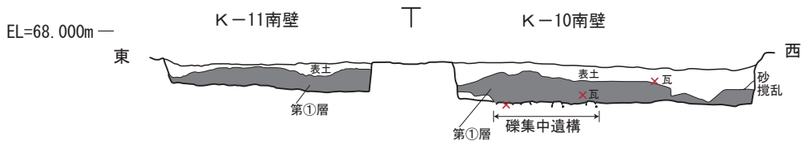
4. 礫集中遺構

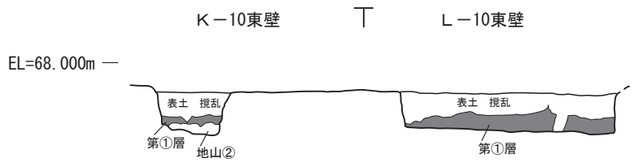
Ｋ－10グリッドにおいて確認された。長さ約2.3m、幅約0.8m、深さ約40㎝程に掘り込まれ、主に琉球石灰岩礫を充填している。遺構確認面では、特別な平面形を把握することは、できなかったことから、用途は不明である。水捌けのための施設、あるいは、廃棄物貯蔵施設（シーリ）等も検討したが、判然としない。

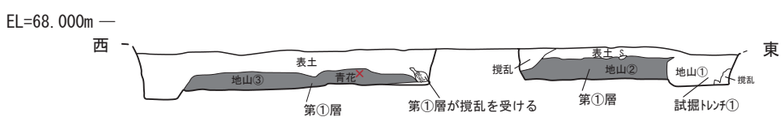
同遺構の東側を半裁した。出土遺物としては、沖縄産施釉陶器、無釉陶器が多数を占める。特に、沖縄産無釉陶器は大型の資料が目に付いた。

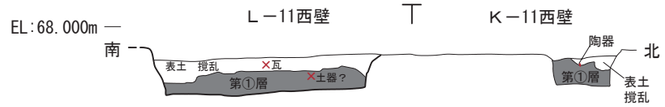


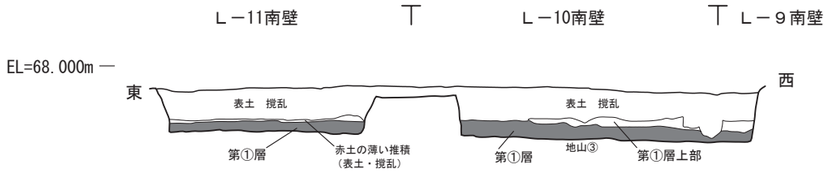


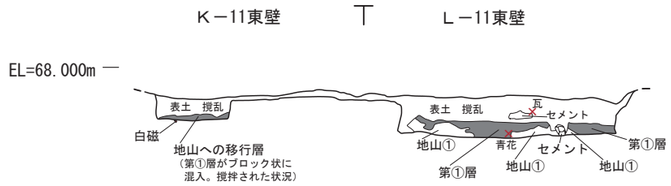












第11図　遺跡の層序

0　4m

1/80

9　　10　　11

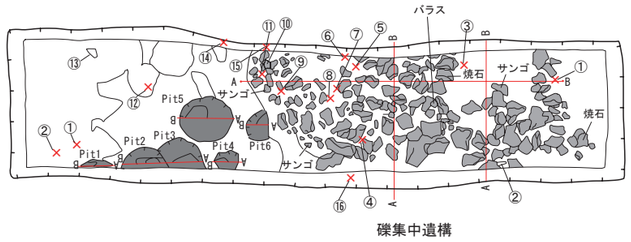
K

L

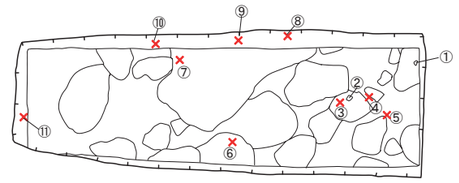
M

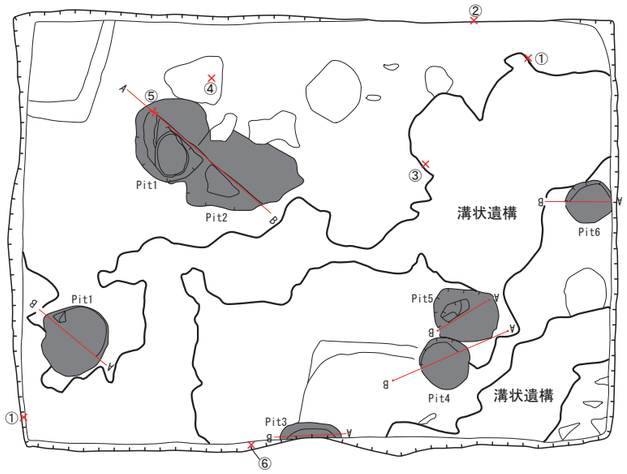
K-10
X=23,916.542（世界測地形）
Y=21,556.057（第ⅩⅤ系）

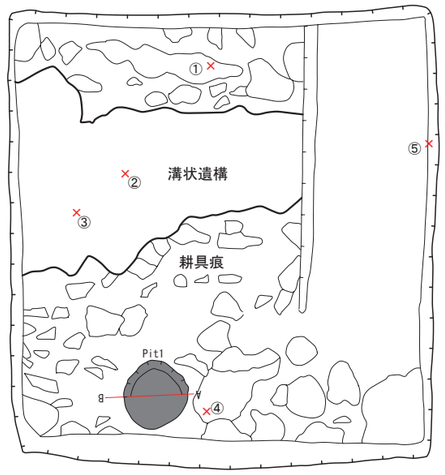
M-10
X=23,909.035（世界測地形）
Y=21,553.291（第ⅩⅤ系）



礫集中遺構







0　　2m

1/40

第12図　調査区平面図

第２表　ドット遺物一覧

グリッド	遺物No	点上No	挿図番号 図版番号	種　類	器　種	部　位	点数	X	Y	EL	中国産青花	中国産青磁	中国産 褐釉陶器	本土産磁器	本土産染付	沖縄産 施釉陶器	沖縄産 無釉陶器	沖縄産 陶質土器	瓦	円盤状製品	土　器	土製品	土塊	鉄製品	合計
K-９	①	K-9-①		瓦	赤瓦	不明	1	23,916.045	21,551.547	67.110									1						1
K-９	②	K-9-②		土製品	羽口	不明	1	23,916.045	21,551.397	67.093												1			1
K-10	①	K-10-①		鉄製品	刃物	刃部	1	23,915.385	21,554.607	67.058														1	1
K-10	②	K-10-②		沖縄産施釉陶器	壺	胴部	1	23,914.985	21,554.097	67.089						1									1
K-10	③	K-10-③		土塊	不明	不明	1	23,915.685	21,554.097	67.089													1		1
K-10	④	K-10-④		沖縄産無釉陶器	鉢	胴部	1	23,915.465	21,553.317	67.106							1								1
K-10	⑤	K-10-⑤	第15図　２ 図版11の２	本土産磁器	小碗	口縁～底部	1	23,915.905	21,553.427	67.135				1											1
K-10	⑥	K-10-⑥		沖縄産施釉陶器	水注	胴部	1	23,915.985	21,553.367	67.140						1									1
K-10	⑦	K-10-⑦		本土産磁器	碗	口縁部	1	23,915.805	21,553.247	67.122				1											1
K-10	⑧	K-10-⑧		沖縄産無釉陶器	鉢	底部	1	23,915.765	21,553.187	67.131							1								1
K-10	⑨	K-10-⑨		瓦	灰色：平瓦	胴部	1	23,915.925	21,552.907	67.123									1						1
K-10	⑩	K-10-⑩		沖縄産無釉陶器	不明	不明	1	23,916.125	21,552.897	67.120							1								1
K-10	⑪	K-10-⑪		瓦	灰色：平瓦	胴部	1	23,916.075	21,552.827	67.091									1						1
K-10	⑫	K-10-⑫		沖縄産陶質土器	不明	不明	1	23,916.285	21,552.147	67.141								1							1
K-10	⑬	K-10-⑬		中国産褐釉陶器	壺	胴部	1	23,916.585	21,551.837	67.103			1												1
K-10	⑭	K-10-⑭		沖縄産施釉陶器	蓋	摘み部	1	23,916.335	21,552.897	67.542						1									1
K-10	⑮	K-10-⑮		瓦	不明	不明	1	23,916.275	21,552.787	67.453									1						1
K-10	⑯	K-10-⑯		沖縄産無釉陶器	不明	胴部	1	23,915.235	21,553.137	67.192							1								1
K-11	①	K-11-①		本土産染付	不明	胴部	1	23,914.055	21,558.457	67.325					1										1
K-11	②	K-11-②		瓦	不明	胴部	1	23,914.015	21,557.987	67.302									1						1
K-11	③	K-11-③		瓦	不明	胴部	1	23,913.995	21,557.887	67.302									1						1
K-11	④	K-11-④		土器	不明	不明	1	23,913.955	21,558.107	67.298												1			1
K-11	⑤	K-11-⑤		沖縄産施釉陶器 中国産褐釉陶器	碗 不明	胴部 胴部	2	21,913.815	21,558.157	67.301			1			1										2
K-11	⑥	K-11-⑥		土塊	不明	不明	1	23,914.005	21,557.137	67.299													1		1
K-11	⑦	K-11-⑦		土器	不明	不明	1	23,914.615	21,557.017	67.281												1			1
K-11	⑧	K-11-⑧		本土産染付	碗	底部	1	23,914.525	21,557.717	67.534					1										1
K-11	⑨	K-11-⑨		沖縄産無釉陶器　瓦	不明 赤瓦：平	胴部 胴部	2	23,914.595	21,557.427	67.466							1		1						2
K-11	⑩	K-11-⑩	第21図　13 図版16の13	円盤状製品	瓦	完形	1	23,914.785	21,556.907	67.341										1					1
K-11	⑪	K-11-⑪		沖縄産無釉陶器	火炉	口縁部	1	23,914.615	21,555.917	67.508							1								1
L-９	①	L-9-①		瓦	赤瓦：丸	端部	1	23,911.385	21,549.417	67.206									1						1
L-10	①	L-10-①		土器	不明	胴部	1	23,912.435	21,555.327	67.124												1			1
L-10	②	L-10-②		中国産青花	碗	口縁部	1	23,912.785	21,553.075	67.357	1														1
L-10	③	L-10-③		瓦	平	胴部	1	23,912.025	21,552.447	67.110									1						1
L-10	④	L-10-④		中国産青磁	不明	胴部	1	23,913.035	21,551.337	67.072		1													1
L-10	⑤	L-10-⑤		沖縄産施釉陶器 沖縄産陶質土器　瓦	小碗 不明 灰色：平	口縁部 胴部 端部	3	23,912.955	21,550.917	67.061						1		1	1						3
L-10	⑥	L-10-⑥		瓦	平	胴部	1	23,910.705	21,550.757	67.212									1						1
L-11	①	L-11-①		欠番																					0
L-11	②	L-11-②		瓦	赤瓦：平	胴部	1	23,910.905	21,555.307	67.174									1						1
L-11	③	L-11-③		沖縄産無釉陶器	不明	胴部	1	23,910.775	21,554.927	67.149							1								1
L-11	④	L-11-④		沖縄産無釉陶器	不明	胴部	1	23,909.265	21,555.267	67.152							1								1
L-11	⑤	L-11-⑤		本土産磁器	不明	胴部	1	23,910.405	21,557.237	67.187				1											1
						合計	1	1	2	3	2	5	8	2	12	1	3	1	2	1	44

第３表　ピット計測一覧

確認グリッド	番号	挿図番号 図版番号	長軸	短軸	深さ	平面形	断面形	断面の形状	長軸方向	出土遺物
			(cm)	(cm)	(cm)	上面				
K－10	1	第12図 図版６	15	(7)	6	不定形	柄杓状		N － 107° －E	沖縄産無釉陶器(1)
K－10	2	第12図 図版６	30	(13)	15	ほぼ円形	略Ｖ字状		N － 106° －E	土塊(3) 獣骨(1)
K－10	3	第12図 図版６	34	(21)	5	ほぼ円形	鍋底状		N － 133° －E	―
K－10	4	第12図 図版６	18	(11)	3	不定形	(鍋底状)		N － 97° －E	―
K－10	5	第12図 図版６	34	30	4	楕円形	鍋底状		N － 112° －E	土製品(2)
K-10	6	第12図 図版６	22	(18)	5	(楕円形)	(鍋底状)		N － 24° －E	沖縄産施釉陶器(1)
L－９	1	第12図 図版８	45	45	17	ほぼ円形	鍋底形		N － 152° －E	中国産青磁(1) 中国産青花(1) 沖縄産施釉陶器(1) 沖縄産無釉陶器(1) 土塊(2)

確認グリッド	番号	挿図番号 図版番号	長軸	短軸	深さ	平面形	断面形	断面の形状	長軸方向	出土遺物
			(cm)	(cm)	(cm)	上面				
L－10	1	第12図 図版８	55	48	32	楕円形	U字状		N － 153° －E	中国産青磁(2) 中国産青花(1) 中国産褐釉陶器(1) 沖縄産無釉陶器(1) 土製品(2)
L－10	2	第12図 図版８	75	55	36	隅丸三角形	U字状		N － 120° －E	中国産青磁(2) 中国産青花(1) 沖縄産施釉陶器(2) 沖縄産無釉陶器(2) 沖縄産陶質土器(2) 鉄(1)
L－10	3	第12図 図版８	40	(10)	6	(楕円形)	鍋底状		N － 110° －E	－
L－10	4	第12図 図版８	34	33	20	ほぼ円形	U字状		N － 170° －E	中国産青磁(1) 沖縄産無釉陶器(1) 瓦(2) 土塊(4)
L－10	5	第12図 図版８	43	34	33	隅丸方形	略三角状		N － 117° －E	中国産青花(1) 沖縄産無釉陶器(1) 土塊(1)
L－10	6	第12図 図版８	30	27	20	ほぼ円形	U字状		N － 113° －E	土塊(1) 鉄(1)
L－11	1	第12図 図版９	44	40	7	ほぼ円形	鍋底状		N － 28° －E	－

第４表　遺物出土一覧

種類＼グリッド		ドット遺物	ピット出土遺物	礫集中遺構	表採	第①層							K-10		試掘調査				合計
						一括	(0/20)	(20/40)	(30/40)	(40/60)	地山直上最下部	カベ	カベ	一括	point 1	point 3	point 4	point 5	
中国産	青　花	1	4	3	9	24	98	54	1	19		6	8						227
	白　磁				1	1	1	1				1							5
	青　磁	1	6			3	7	29		2	1	2	1						52
	褐　釉	2	1		1		43	31		5		1	1	1			1		87
	無釉陶器						2	2											4
	その他					1	3	1											5
本土産	磁　器	3		13	4	10	57	63		12		4	2		1				169
	染付	2		1			2	1									1		7
	陶器			1		6	3	1		2									13
	白磁			1			8												9
沖縄産	施釉陶器	5	4	57	7	56	190	178		30	6	8	5					1	547
	無釉陶器	8	7	46	6	19	193	112		27		7	3	2		1	1	2	434
	陶質土器	2	2	13	1	9	82	45		9	1	2	3						169
	瓦質土器		1			2	1				1								5
瓦		12	2	8	3	17	419	111		9	4	9	9		1				604
塼				1															1
円盤状製品		1				1	6	9		4									21
土　器		3				1	10			1									15
土製品		1	5								1								7
土　塊 焼　土		2	10				1	18			6								37
玉類							1												1
金属製品	簪							2											2
	銭貨							1									1		2
	鉄製品	1					2			1	2								6
	鉄		2		1	3	8	19				1			1				35
獣　骨			1	1			6	2			1								11
貝					1		11	1											13
合　計		44	45	145	34	153	1154	681	1	121	23	41	32	3	3	1	4	3	2488

第Ⅵ章　遺物

本遺跡からの出土遺物は総数2,488点を数えた（第４表）。その多くが小片であった。その内、各グリッドからの出土（遺物包含層など）は2,209点と大半を占める。表採34点、試掘調査11点、ドット遺物として44点（第２表）を取り上げた。

遺構からの出土は、半裁したピットから45点（第３表）、礫集中遺構から146点であった（第４表）。遺物の種類としては、中国産陶磁器では、青花・白磁・青磁・褐釉陶器・無釉陶器、本土産陶磁器では、磁器・染付・白磁・陶器が見られた。また、沖縄産陶器では、施釉陶器・無釉陶器・陶質土器・瓦質土器などが見られた。その他、土器、瓦や塼、円盤状製品、玉類、簪・銭貨など多種多様な遺物が得られている。

出土数では沖縄産陶器が1,155点、瓦が604点と多く突出している。続いて中国産陶磁器381点、本土産陶磁器198点と続く。

遺物出土一覧を第４表に示し、以下、種類ごとに特徴的な遺物の概略を記す。

第１節　中国産青花

中国産陶磁器（381点）では、先述した多様な種類が得られた。その内、青花が227点と多くを占めた。次いで褐釉陶器が87点、青磁52点、白磁５点、無釉陶器４点と続く（その他の資料５点）。

第５表　中国産青花観察一覧

法量単位：cm（残存値）

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	口　径 器　高 底　径	色調	文様・特徴など	出土地点
第14図　1 図版10の1	青花	碗	口縁部	15.4 (4.7) ―	灰白色 (10Y　8/1)	口縁部資料。口唇部で強めの外反。 外面、口唇部直下と腰部に圏線を1条ずつ廻らせ、その間に草文を配す。 内面も口縁と腰部に圏線を1条ずつ廻らす。	L-11グリッド 第①層
第14図　2 図版10の2	青花	小碗	口縁部	9.2 (3.8) ―	灰白色 (10Y　8/1)	口縁部資料。口縁部やや外反する。 外面、口縁直下に圏線を2条、胴部には丸い花文を配し、空白に蔓様な文様で埋める。 内面、口縁直下に太めの圏線を1条、腰部に細い圏線を2条廻らす。 呉須の発色は濃い。	K-10グリッド 礫集中遺構（西）
第14図　3 図版10の3	青花	小碗	底部	― (3.2) 4.0	灰白色 (10Y　8/1)	底部資料。 総釉だが、畳付けは露胎。 外面、細線による蓮華唐草を描く。 高台には圏線を2条廻らす。 内面は文様なし。	L-10グリッド 第①層（0/20）
第14図　4 図版10の4	青花	皿	底部	― (2.5) 8.4	灰白色 (10Y　8/1)	底部資料。 総釉だが、畳付けは露胎。 残存の外面、外底面は文様なし。 内底に堺線2条、その内側に草花文を配す。全体構図不明。呉須の発色は濃い。	L-10グリッド 第①層（0/20）

出土地点から見ると、第①層（0/20）、次いで第①層（20/40）からの出土で全体の約71％を占める。青磁が第①層最下部で、１点得られている。

これらの資料の中で多く得られた青花の中から４点を図化し、第14図に示す。また、観察を第５表に記す。

第14図１は、碗の口縁部である。外面胴部に呉須による草文を描く。Ｌ－11グリッド第①層より出土。

同図２は、小碗で口縁から胴部にかけての資料である。外面胴部に呉須による花文と唐草文を配す。Ｋ－10グリッド礫集中遺構（西）より出土。

同図３は、小碗で底部資料である。外面胴部に呉須による蓮華唐草文を描く。Ｌ－10グリッド第①層（0/20）より出土。

同図４は、皿の底部資料である。内底面に呉須による草花様の文様が見られるが、構図は不明。Ｌ－10グリッド第①層（0/20）より出土。

第２節　本土産陶磁器

本土産陶磁器（198点）でも、多様な種類が得られている。磁器169点、染付７点、陶器13点、白磁９点である。出土地点から見ると、第①層（0/20）から70点、第①層（20/40）から65点、次いで、礫集中遺構、第①層一括から16点、第①層（40/60）から12点と続く。得られた資料の中から磁器８点、染付１点、白磁１点と陶器３点を図化し、第15・16図に示す。観察は第６・７表に示す。

第15図１は、クロム青磁と称される小碗である。外面胴部に飛び鉋文様が施される。Ｋ－10グリッド礫集中遺構（西）より出土。

同図２も小碗で口縁から高台にかけての資料である。外面胴部には「X」様を３つ横に連ねた単位のスタンプ文様を配置。見込みには、「雁金」を施す。Ｋ－10グリッド　ドット⑤　より出土。

同図３は、小碗で、口縁から高台までの資料である。胴部に銅版転写技法による桜の花と葉文が施される。間をおいて、ゴム判と見られる文字で、歌の一説（「・・・朝日に匂ふ・・・」）が施される。Ｋ－10グリッド礫集中遺構（東）より出土。

同図４は、小碗の口縁部資料で、同図３同様のゴム判と見られる文字で、同図３と同じ歌の一説（「・・・朝日に匂ふ山桜かな・・・」）が施される。Ｋ－10グリッド礫集中遺構（西）より出土。

同図５は、碗の底部資料で、外面と見込み呉須による花草文が施される。Ｌ－10グリッド第①層(0/20)より出土。

同図６は、染付の碗で、外面に呉須による花草文が施される。Ｌ－10グリッド第①層（0/20）より出土。

同図７から同図９は、型紙刷り技法による文様を施す。

同図７は口縁部資料で、外面に５弁の花と唐草、内面も５弁の花が帯状に施される。Ｋ－10グリッド礫集中遺構より出土。

第６表　本土産磁器・染付・白磁観察一覧

法量単位：㎝（残存値）

挿図番号 図版番号	器種	部位	口　径 器　高 底　径	素地	文様・特徴など	出土地点
第15図　1 図版11の1	磁器 小碗	口～底	8.2 3.8 3.4	灰白色 (N8/)	クロム青磁の全形が窺える資料。 外面は鮮やかな緑色で、飛び鉋文が4段施される。 内面は白色。高台は「ハ」の字状に広がる形状。 高台内、畳付けは露胎。	K-10グリッド 礫集中遺構(西)
第15図　2 図版11の2	磁器 小碗	口～底	8.0 4.0 3.0	灰白色 (5Y8/1)	小碗で、全形が窺える資料。 総釉だが、畳付けは露胎となる。 外面に、コバルトで、篆字文を2種描く。 内底にも文様が見られる。 口唇部は錆釉を施す。	K-10グリッド ドット⑤
第15図　3 図版11の3	磁器 小碗	口～底	7.0 4.5 3.0	灰白色 (N8/)	小碗で、全形の復元可能な資料。 総釉だが、畳付けは露胎。口唇は丸味を持ち、口縁形直口となる。高台際は、強く屈曲する。 外面に、桜の花、蕾、葉の文様。花、蕾は桃色、葉は緑色で施す。間をおいて、緑色で「朝日に匂う…」と旧かな使いで施される。 高台に圏線が2条廻る。内面は無文。	K-10グリッド 礫集中遺構（東）
第15図　4 図版11の4	磁器 小碗	口縁部	7.0 (3.7) ―	灰白色 (N8/)	小碗の口縁資料。残存部、総釉。 口唇やや尖り、口縁形は直口となる。 外面に、コバルトで「朝日に匂う山桜かな」と旧かな使いで施される。 内面は無文。	K-10グリッド 礫集中遺構(西)
第15図　5 図版11の5	磁器 碗	底部	― (3.7) 4.6	灰白色 (N8/)	碗の底部資料。総釉だが、畳付けは露胎。 外面にコバルトで、草花文が施される。腰部と高台に1本ずつ圏線が廻る。 内底面もコバルトによる、圏線1条とその中に線を縦横に描いた文様が見られる。 外面、内底どちらも構図は不明。	L-10グリッド 第①層(0/20)
第15図　6 図版11の6	染付 碗	底部	― (3.9) 5.6	灰白色 (10Y　8/1)	碗の底部資料。 総釉だが、畳付けは露胎。 外面、高台に2条、腰部に1条の圏線を廻らす。腰部圏線より上方に草文？が見られるが、空白部分が大きく構図などは不明。内面は文様なし。	L-10グリッド 第①層(0/20)
第15図　7 図版11の7	磁器 碗	口縁部	14.4 (3.0) ―	灰白色 (5Y8/1)	碗の口縁資料。残存部総釉。 口唇は舌状で大きく外反する。 内外面ともに、コバルトによる型紙刷りの文様を施す。 外面は、唐草と五弁の花が配される。 内面も、同様な唐草と五弁花が帯状に口縁部の外反部分に施される。文様帯下に圏線が1条廻る。	K-10グリッド 礫集中遺構
第15図　8 図版11の8	磁器 碗	口縁部	12.6 (4.4) ―	灰白色 (5Y8/1)	碗の口縁資料。残存部総釉。 口唇は舌状で外反する。 内外面ともに、コバルトによる文様が施される。 外面大きめの4弁の花と円形の唐草を配す。 内面は、5弁の花文と唐草を口縁部に帯状に施文。 文様帯下に1条、腰部に2条の圏線を廻らす。	K-10グリッド 礫集中遺構
第15図　9 図版11の9	磁器 碗	底部	― (1.7) 4.7	灰白色 (5Y8/1)	碗の底部資料。総釉だが、畳付けは露胎となる。 内外面ともに、コバルトによる型紙刷りの文様を施す。 外面は胴部欠損のため文様構成は不明。腰部に三角形を向い合せにした幾何学文を帯状に配す。 高台に圏線を1条廻らす。 内底面に5弁の花を施す。目痕が3個確認できる。	K-10グリッド 礫集中遺構（東）
第15図　10 図版11の10	白磁 皿	口～底部	12.6 2.6 7.8	灰白色 (N8/)	口縁から底部にかけての資料。 口唇は丸くなり、やや外反する。 外面口縁近くに、素地の亀裂が見られる。 底面は中央に向かい反る形状。 畳付けと外底面中央付近は、露胎となる。	K-10グリッド 礫集中遺構

同図８も口縁部資料で、外面に４弁の花と唐草、内面は５弁の花と唐草を帯状に施す。同図７に比べ、文様の幅や花弁の色の滲みなど雑さが目立つ。Ｋ－10 グリッド礫集中遺構より出土。同図９は、底部資料で、腰部に幾何学文様、見込みに５弁花の文様を施し、目跡が３個確認できる。文様は全体的に色が濃く、滲みも見られる。Ｋ－10 グリッド礫集中遺構（東）より出土。

同図 10 は、白磁の皿で、口縁から高台にかけての資料である。外面の口縁折り返し部に素地の細かい亀裂が確認できることから型成形と見られる。Ｋ－10 グリッド礫集中遺構より出土。

第 16 図１は、壺の底部資料である。外面に灰釉を施し、斜め格子の文様を描く。Ｌ－11 グリッド第①層より出土。

同図２も壺の底部資料である。内外面ともに褐色釉が剝落し、経年を感じさせる。Ｌ－10 グリッド第①層（0/20）より出土。

同図３は、急須の口縁部から胴部にかけての資料である。内外面ともに茶褐色で艶がある。外面に青色で竹の文様が描かれ、文様は厚みを持ち剝がれた部分も見られる。Ｋ－10 グリッド礫集中遺構（西）より出土。

第７表　本土産陶器観察一覧

法量単位：cm（残存値）

挿図番号 図版番号	器種	部位	口　径 器　高 底　径	色　調 素　地	文様・特徴など	出土地点
第16図　1 図版12の1	壺	底部	－ (4.0) 12.4	外面:褐灰色 内面:にぶい黄褐色 素地:褐灰色 (10YR 5/1)	底部資料、壺と見られる。 外面に篦ナデ調整痕が見られる。外面、灰釉を施釉。釉色より濃い灰色で、斜め格子の文様が描かれる。外底面も灰釉を施す。 畳付けと内面は、露胎となる。 素地は芯部が黄褐色、外側は灰褐色のサンドイッチ状。	L-11グリッド 第①層
第16図　2 図版12の2	壺	底部	－ (2.5) 12.8	外面:黒褐色 内面:黒褐色 素地:赤褐色 (5YR 4/6)	底部資料、壺と見られる。 残存部、内外面施釉。外底面は露胎となる。 内外面ともに、褐色釉が剝落。外面、底部近く、ナデ調整痕が見られ、稜となる。内面も調整痕が確認できる。	L-10グリッド 第①層(0/20)
第16図　3 図版12の3	急須	口縁部	5.8 (4.1) －	外面:極暗褐色 内面:極暗褐色 素地:赤褐色 (10R 4/6)	口縁部資料。口縁内部から外面は施釉。 胴部は筒状に上部へ延び、肩部で内側へ曲る形状。 口唇は段を設け蓋受けとなる。 胴部に、円形の剝がれたような痕が見られる。注口の接続部の可能性がある。 外面肩部に、青色の竹様の文様が施される。また笹の形状で色が剝がれ落ちた痕が見られる。 内面は無文。	K-10グリッド 礫集中遺構(西)

第３節　沖縄産陶器

沖縄産陶器（1,155 点）では、施釉陶器 547 点、無釉陶器 434 点、陶質土器 169 点、瓦質土器５点の４種が確認された。層序別の出土状況は、第①層（0/20）の 466 点と第①層（20/40）の 335 点を合わせて 801 点で全体の約 69%を占める。次いで、礫集中遺構から 116 点、第①層一括から 86 点、第①層（40/60）から 66 点と続く。

図化した資料を種類別に第 17 図から第 20 図に、個々の観察を第８・９表に示す。

１．施釉陶器

第17図１は、碗の底部である。茶褐色釉の単掛け資料で、釉に艶はなく発色していない。Ｌ－10 グリッド①層 0/20 より出土。

同図２・３は、どちらも碗の底部資料で、内外面に白化粧を施し、透明釉を掛ける。Ｋ－10 グリッド礫集中遺構出土。

同図４は、「あんびん」と称される大型急須の口縁から胴部の資料である。取手の元部と注口が若干残存する。内外面は黒色釉を施し、内面の蓋合せ部は露胎となる。Ｋ－10 グリッド礫集中遺構（東）より出土。

同図５は、急須の底部資料である。外面は白化粧を施し、上部のみ透明釉を掛ける。底部は三角錐形の脚が３個付くタイプだが１個のみ残存する。Ｋ－10 グリッド礫集中遺構より出土。

同図６は、壺と見られる資料の底部である。外面黒色釉を施す。高台と内面は露胎となる。Ｋ－10 グリッド礫集中遺構より出土。

同図７は、火炉と見られる形状の底部から胴部にかけての資料である。外面腰部まで黒色釉を施す。腰部以下と内面は露胎となる。Ｋ－10 グリッド礫集中遺構より出土。

２．無釉陶器

第 18 図１は、鉢の口縁部資料である。口縁は、逆「Ｌ」字状に折れる。口縁直下にヘラ調整痕が見られる。Ｌ－10 グリッド第①層（0/20）より出土。

同図２は、鉢の底部資料である。器内外面に、ヘラ調整痕が見られる。Ｌ－10 グリッド第①層 (0/20) より出土。

同図３も鉢の底部資料である。底部と外底面にヘラ調整痕が見られる。Ｌ－９グリッド第①層 (0/20) より出土。

同図４から６は、擂鉢の底部である。４は内面のすり目が細かく、内底面に白色（石灰？）の塊が付着する。Ｋ－10 グリッド礫集中遺構より出土。

同図５は、内面のすり目 12 本一組と見られ、外面下部と外底面にヘラ調整痕が見られる。Ｌ－10 グリッド第①層（0/20）より出土。

同図６は、内面のすり目は一組８本以上で施される。外面と外底面にヘラ調整痕が見られる。Ｌ－10 グリッド第①層（0/20）より出土。

第 19 図１は、壺の底部から胴部にかけての資料である。外底面をナデ調整。内面は轆轤痕が明瞭。

Ｋ－10 グリッド礫集中遺構（東）より出土。

同図２も壺の底部資料である。外面下部をヘラ調整するが雑、外底面は未調整、内面は轆轤痕が見られる。Ｌ－10 グリッド第①層より出土。

同図３は、甕の口縁部資料である。幅広の帯状の口縁形状で、凹線が廻る。Ｌ－10 グリッド第①層（0/20）より出土。

３．陶質土器

第 19 図４は、「ミジクブサー」と称される鉢の口縁から胴部にかけての資料である。口唇先端は舌状で内湾する器形。Ｋ－10 グリッド礫集中遺構（西）より出土。

４．瓦質土器

第 20 図１は、型作りによる炉の口縁部と見られる。平面形状は方形になると考えられる。口縁は逆「Ｌ」字状に折り曲げ、全体はナデ調整が施される。残存の形状などから「馬蹄形焜炉」の可能性が示唆される。Ｌ－10 グリッド第①層（0/20）より出土。

第８表　沖縄産施釉陶器観察一覧

法量単位:cm(残存値)

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底径	色調	素地	文様・特徴など	出土地点
第17図　1 図版13の1	碗	底部	— (4.3) 5.4	外面:灰黄褐色 内面:灰黄色褐色	褐灰色 (10YR　5/1)	碗の底部資料である。 内面から外面腰部まで施釉。腰部から外底面は露胎となる。 内底面に砂粒大の付着物が見られる。 釉は発色せず、茶褐色で、艶はない。	L-10グリッド 第①層(0/20)
第17図　2 図版13の2	碗	底部	— (4.0) 5.8	外面:灰白色 内面:灰白色	にぶい黄橙色 (10YR 7/4)	碗の底部資料である。 内外面全体に白化粧を施し、透明釉を施釉。畳付けは露胎となる。 見込みに蛇の目釉剥ぎを施す。蛇の目際に器物の重ね痕が確認できる。 内面に貫入が見られる。	K-10グリッド 礫集中遺構
第17図　3 図版13の3	碗	底部	— (2.5) 6.4	外面:灰白色 内面:灰白色	にぶい黄橙色 (10YR 7/4)	碗の底部資料である。 内外面全体に白化粧を施し、透明釉を施釉。畳付けは露胎となるがアルミナの付着が見られる。 見込みに蛇の目釉剥ぎを施す。蛇の目内に器物の重ね痕が確認できる。 全体に粗い貫入が見られる。	K-10グリッド 礫集中遺構
第17図　4 図版13の4	急須	注口	11.7 (10.3) —	外面:黒色 内面:黒色	褐灰色 (10YR　5/1)	大型の急須で、口縁から注口までの資料である。内外面に黒色釉を施す。口縁の蓋合せ部分は露胎となる。外から内方向に直径約2cmの孔を設け注口を貼り付ける。把手は同素材の陶製で幅約4.5cmの帯状。把手は注口直上から反対側に弧状に張り付けられる。 把手、注口先端は欠損。	K-10グリッド 礫集中遺構(東)
第17図　5 図版13の5	急須	底部	— (3.7) 7.3	外面:灰白色 内面:灰白色	淡黄色 (2.5Y　8/3)	急須の底部である。外面は白化粧を施し、呉須の文様を施文後、外面上部のみに透明釉を施す。文様は下部方向に垂れ溜まった状態で先端は丸くなる。構図は不明。内面は、透明釉のみを施釉。底部には三角錐状の脚が3ヶ付くタイプである。外底面に器物の溶着が見られる。	K-10グリッド 礫集中遺構
第17図　6 図版13の6	壺	底部	— (10.0) 11.2	外面:黒色 内面:にぶい黄橙色	明黄褐色 (10YR　7/6)	形状から壺とした。 下部まで黒色釉を施釉。高台は露胎となる。 内面も露胎である。	K-10グリッド 礫集中遺構
第17図　7 図版13の7	火炉	底部	— (7.8) 9.0	外面:黒色 内面:浅黄橙色	浅黄橙色 (10YR　8/3)	胴部は直に腰部まで至り、腰部から高台へ「く」の字状に折れる形状。 外面の腰部まで、黒色釉を施釉し、それ以下と内面は露胎となる。 腰下部に凹線が3条廻る。外面の残存上部に突起が見られる。	K-10グリッド 礫集中遺構

第９表　沖縄産無釉陶器・陶質土器・瓦質土器観察一覧

法量単位:cm(残存値)

挿図番号 図版番号	種類	器種 部位	口径 器高 底径	色調	文様・特徴など	出土地点
第18図　1 図版14の1	無釉陶器	鉢 口縁部	26.1 (1.8) —	外面:明赤褐色 内面:明赤褐色	口縁逆「L」字に折れる形状。 鍔上面の外縁に凹線が1条廻る。 口縁直下に、ヘラ調整痕が見られ、稜線を成す。	L-10グリッド 第①層(0/20)
第18図　2 図版14の2	無釉陶器	鉢 底部	— (4.5) 13.6	外面:明赤褐色 内面:明赤褐色	鉢の底部資料。 外面下部にヘラ調整を施す。外底面にもヘラ調整を施すが、一部行き届かない。 内面は轆轤成形痕が明瞭。	L-10グリッド 第①層(0/20)
第18図　3 図版14の3	無釉陶器	鉢 底部	— (4.3) 19.3	外面:明赤褐色 内面:明赤褐色	底部と外底面にヘラ調整痕が明瞭に残る。 底面中央部に、打割いた様な形状の孔が見られる。破損なのか二次使用痕かは不明。	L-9グリッド 第①層(0/20)
第18図　4 図版14の4	無釉陶器	擂鉢 底部	— (6.5) 13.7	外面:暗褐色 内面:赤褐色	擂鉢の底部資料。外面は暗褐色を呈する。外面はヘラ調整を施す。内面には細かいすり目が見られる。内底面に砂粒などの白色の塊が付着する。	K-10グリッド 礫集中遺構
第18図　5 図版14の5	無釉陶器	擂鉢 底部	— (5.0) 10.9	外面:明赤褐色 内面:明赤褐色	擂鉢の底部資料。 外面下部と外底面にヘラ調整を施す。 内面に12本一組と見られるすり目が施される。	L-10グリッド 第①層(0/20)
第18図　6 図版14の6	無釉陶器	擂鉢 底部	— (4.2) 12.0	外面:赤褐色 内面:赤褐色	擂鉢の底部資料。 外面と外底面にヘラ調整を施すが雑。 調整痕は右方向に成される。 内面のすり目は、一組8本以上で施される。	L-10グリッド 第①層(0/20)
第19図　1 図版15の1	無釉陶器	壺 胴～底部	— (10.2) 9.3	外面:にぶい黄褐色 内面:灰色	壺の胴部から底部にかけての資料。 外面ナデ調整を施すが雑。底面から約2.5cmの所に明瞭な調整による稜が見られる。 内面は、轆轤成形痕が明瞭。	K-10グリッド 礫集中遺構(東)
第19図　2 図版15の2	無釉陶器	壺 底部	— (3.0) 12.0	外面:赤褐色 内面:赤褐色	壺の底部資料。 外面下部にヘラ調整を施すが、雑でヘラ痕が抉れる。外底面は未調整。 内面には轆轤痕が見られる。	L-10グリッド 第①層
第19図　3 図版15の3	無釉陶器	甕 口縁部	32.0 (4.8) —	外面:暗褐色 内面:暗赤褐色	甕の口縁資料。 破片のため口径は推定である。 口唇幅広で、平坦になる。口縁から直に下へ延びる形状。外面に凹線が3条廻る。その下に少し間を空けて凸線が1条確認できる。	L-10グリッド 第①層(0/20)
第19図　4 図版15の4	陶質土器	鉢 口縁部	17.4 (5.5) —	外面:橙色 内面:橙色 素地:橙色	口縁先端は舌状で、内湾する器形。 丁寧な轆轤成形、調整が施される。 器面は内外共に滑らか。	K-10グリッド 礫集中遺構(西)
第20図　1 図版15の5	瓦質土器	炉 口縁部	— (5.4) —	外面:橙色 内面:橙色	平面形は方形になると見られる。 口縁は逆「L」字状に折り曲げ、幅約4cmの平坦面になる。先端に向かい厚みは狭くなる。約20mmから7mm。 口縁を胴部側に折曲げ、縁を削り調整。折曲げた部分は撫付けが雑で隙間が見られる。 内面はナデ調整が施される。胴部の厚みはほぼ一定で、約15mm。 外底面に約幅1cm、長さ3.2cmの方形状凸が見られる。	L-10グリッド 第①層(0/20)

第４節　円盤状製品

本遺跡から総数 21 点の出土があった。内訳は、沖縄産無釉陶器８点、陶質土器５点、瓦５点、中国産青花１点、中国産褐釉陶器１点、本土産磁器１点の出土である（第 12 表）。出土地点を見ると、Ｌ－10 グリッドから 14 点と出土数の半分以上を占める。層序別での出土状況は、第①層（0/20）から６点、第①層（20/40）から９点、第①層（40/60）から４点、第①層一括及びドット取り上げ遺物で１点ずつである。

円盤状製品 21 点中 15 点を図化し、第 21 図に示した。計測一覧を第 10 表に、観察一覧を第 11 表に、素材別出土状況を第 12 表及び第 13 図に示した。参照いただきたい。

第５節　玉類

本遺跡から、石製と見られる小玉が１点出土している。第 22 図１に図示し、観察を第 13 表に示す。色調は赤茶色を呈す。平面形は丸味を帯びた三角形を状呈し、ほぼ中央に直径約２㎜の孔が穿たれる。Ｌ－９グリッド第①層（0/20）より出土。

第６節　金属製品

本遺跡から出土した金属製品は 45 点である。内訳は簪２点、銭貨２点、鉄製品６点、鉄 35 点であった。

簪２点及び銭貨２点を図化し、第 22 図に示した。また観察を第 13 表に、銭貨の計測一覧を第 14 表に示した。以下に図化した資料の概要を記す。

第 22 図２は、簪で、頭部が「耳かき状」を呈し、竿部は側面から観るとほぼ半分から屈曲している。Ｌ－10 グリッド第①層（20/40）より出土。

同図３も簪で、頭部「耳かき状」を呈す。竿部は２ヶ所で曲がり本来の形状を保っていない。Ｌ－10 グリッド（20/40）より出土。

第 22 図４・５は、銭貨で、どちらも破損している。

同図４は、約半分残存の資料で、錆や磨耗で文字は辛うじて「寶」と「永」の一部が確認できる。残存の文字から「寛永通寶」とした。試掘調査 point５より出土。

同図５は、約 1/4 残存の資料で、文字があったとみられる箇所に僅かな盛り上がりが確認できた。錆や磨耗で判読は不能である。Ｌ－10 グリッド（20/40）より出土。

第10表　円盤状製品計測一覧

法量:cm、g

挿図番号 計測番号	種　類	部位	完／破損	長径	短径	厚さ	重さ	出土地
第21図1 計測No.6	青花	胴部	完	1.1	1.0	0.4	0.6	L-10グリッド　(20/40)
第21図2 計測No.10	沖縄産陶質土器	胴部	完	2.0	2.0	0.4	1.4	K-11グリッド　第①層(20/40)
第21図3 計測No.12	沖縄産陶質土器	胴部	完	2.0	1.8	0.4	1.6	L-11グリッド　第①層(40/60)
第21図4 計測No.11	沖縄産無釉陶器	胴部	完	2.3	2.2	0.9	5.9	L-10グリッド　第①層(0/20)
第21図5 計測No.1	沖縄産陶質土器	胴部	完	2.5	2.2	0.4	2.3	L-10グリッド　第①層(40/60)
第21図6 計測No.13	沖縄産無釉陶器	胴部	完	3.5	3.1	1.2	17.4	L-10グリッド　第①層(0/20)
第21図7 計測No.14	沖縄産無釉陶器	胴部	完	3.7	3.2	1.1	18.2	L-10グリッド　第①層(0/20)
第21図8 計測No.2	瓦	胴部	完	3.6	3.4	1.4	18.2	L-10グリッド　(20/40)
第21図9 計測No.3	瓦	胴部	ほぼ完	3.8	3.5	1.3	18.2	L-10グリッド　(20/40)
第21図10 計測No.4	沖縄産無釉陶器	胴部	完	3.9	3.8	1.1	18.0	L-10グリッド　(20/40)
第21図11 計測No.5	沖縄産無釉陶器	胴部	完	3.9	3.6	1.1	18.9	L-10グリッド　(20/40)
第21図12 計測No.8	瓦	胴部	完	4.1	3.9	1.7	30.7	L-10グリッド　第①層(0/20)
第21図13 計測No.9	瓦	胴部	完	5.1	4.8	1.3	32.3	K-11グリッド　ドット⑩
第21図14 計測No.7	沖縄産無釉陶器	胴部	ほぼ完	5.3	5.2	1.7	66.1	L-10グリッド　第①層(0/20)
第21図15 計測No.15	瓦	胴部	ほぼ完	6.2	6.0	1.6	60.9	L-10グリッド　第①層(40/60)
－ 計測No.18	本土産磁器	胴部	完	2.1		0.6	3.0	L-11グリッド　第①層
－ 計測No.17	中国産褐釉陶器	胴部	破損 1/2	4.0		0.6	3.8	L-10グリッド　第①層(0/20)
－ 計測No.20	沖縄産無釉陶器	胴部	完	4.4		1.2	21.8	L-11グリッド　第①層(20/40)
－ 計測No.21	沖縄産無釉陶器	胴部	ほぼ完	3.6		0.9	19.3	L-11グリッド　第①層(20/40)
－ 計測No.16	沖縄産陶質土器	胴部	破損 1/2	2.7		3.1	1.5	L-11グリッド　第①層(40/60)
－ 計測No.19	沖縄産陶質土器	胴部	破損 1/2	3.6		0.5	5.6	L-10グリッド　(20/40)

第11表　円盤状製品観察一覧

法量単位:cm、g

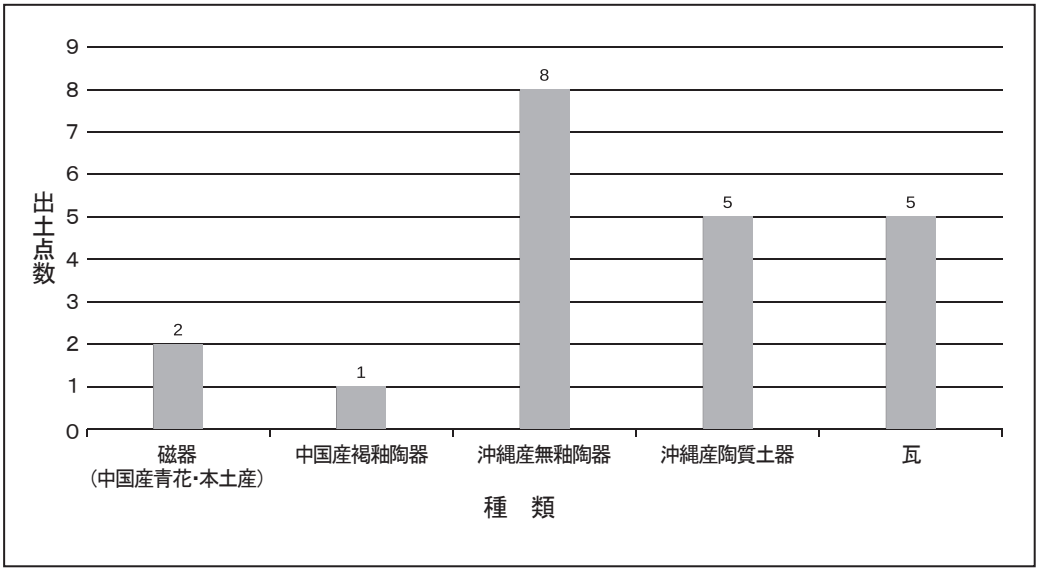
挿図番号 図版番号	種類	部位	完・破	長　径 短　径 最大厚 重　量	素地	文様・観察など	出土地点
第21図　1 図版16の1	青花	胴部	完	1.05 1.00 0.4 0.6	灰色 (N　8/)	青花碗の胴部を利用。外面は呉須による文様が見られる、構成は不明。 周辺部を打割整形する。 平面形は、円形を呈す。	L-10グリッド (20/40)
第21図　2 図版16の2	陶質土器	胴部	完	2.0 1.95 0.4 1.4	橙色 (5YR　6/6)	陶質土器の胴部、湾曲部分を利用。 周辺部を打割整形し、研磨を施す。全体に磨耗している。 平面形は、円形を呈す。	K-11グリッド 第①層(20/40)
第21図　3 図版16の3	陶質土器	胴部	完	2.0 1.8 0.4 1.6	橙色 (5YR　6/6)	陶質土器の胴部を利用。 周辺部を打割整形する。全体に磨耗している。 平面形は、ほぼ円形を呈す。	L-11グリッド 第①層(40/60)
第21図　4 図版16の4	無釉陶器	胴部	完	2.3 2.2 0.9 5.9	明赤褐色 (2.5YR　5/6)	無釉陶器の胴部を利用。内面に轆轤調整の痕が見られる。 周辺部は打割整形する。剝離時の角が残り、整形は粗い。 平面形は、略方形を呈す。	L-10グリッド 第①層(0/20)
第21図　5 図版16の5	陶質土器	胴部	完	2.5 2.2 0.4 2.3	橙色 (5YR　6/6)	陶質土器のやや湾曲した胴部を利用。 周辺部を打割整形する。全体に磨耗し、剝離痕も滑らか。 平面形は、楕円形を呈す。	L-10グリッド 第①層(40/60)
第21図　6 図版16の6	無釉陶器	胴部	完	3.5 3.1 1.2 17.4	にぶい赤褐色 (5YR　4/4)	無釉陶器の胴部を利用。内面に轆轤調整の痕が見られる。 周辺部を打割整形する。内面際に細かい整形痕が見られる。 平面形は、楕円形を呈す。	L-10グリッド 第①層(0/20)
第21図　7 図版16の7	無釉陶器	胴部	完	3.7 3.2 1.1 18.2	暗赤褐色 (5YR　3/3)	無釉陶器の胴部を利用。 周辺部を打割整形する。整形は粗い。 平面形は、略方形を呈す。	L-10グリッド 第①層(0/20)
第21図　8 図版16の8	灰色瓦	胴部	完	3.6 3.4 1.4 18.2	橙色 (5YR　7/8)	瓦の胴部を利用。 周辺部を打割整形する。 全体に磨耗している。裏面に微かな布目が確認できる。 平面形は、ほぼ円形を呈する。	L-10グリッド (20/40)
第21図　9 図版16の9	瓦	胴部	ほぼ完	3.8 3.5 1.3 18.2	明赤褐色 (2.5YR　5/6)	瓦の胴部を利用。 周辺部を打割整形する。 表面に剝離が見られる。裏面には、布目が確認できる。 平面形は、ほぼ円形を呈す。	L-10グリッド (20/40)
第21図　10 図版16の10	無釉陶器	胴部	完	3.9 3.8 1.1 18.0	暗赤褐色 (5YR　3/3)	無釉陶器の胴部、湾曲した部分を利用。 周辺部を打割整形する。裏面に轆轤調整痕が見られる。 平面形は、略方形を呈す。	L-10グリッド (20/40)
第21図　11 図版16の11	無釉陶器	胴部	完	3.9 3.6 1.1 18.9	暗赤褐色 (5YR　3/6)	無釉陶器の胴部を利用。 裏面に轆轤調整痕が見られる。 周辺部を打割整形し、裏面際は細い整形を施す。 平面形は、ほぼ円形を呈する。	L-10グリッド (20/40)
第21図　12 図版16の12	瓦	胴部	完	4.1 3.9 1.7 30.7	褐灰色 (7.5YR　5/1)	瓦の胴部を利用。 周辺部を打割整形する。全体に磨耗している。裏面に、僅かな布目が確認できる。 平面形は、ほぼ円形を呈す。	L-10グリッド 第①層(0/20)

挿図番号 図版番号	種類	部位	完・破	長径 短径 最大厚 重量	素地	文様・観察など	出土地点
第21図 13 図版16の13	瓦	胴部	完	5.1 4.8 1.3 32.3	橙色 (5YR 6/6)	瓦の胴部を利用。 周辺部を打割整形する。剝離が表面にも確認できる。裏面に布目が見られる。 平面形は、ほぼ円形を呈す。	K-11グリッド ドット⑩
第21図 14 図版16の14	無釉陶器	胴部	破	5.3 5.2 1.7 66.1	にぶい赤褐色 (5YR 4/4)	無釉陶器の胴部を利用。 表面に細沈線が数条確認できる。裏面は轆轤整形跡が見られる。 周辺部を打割整形する。また裏面際は、細かい剝離で、丁寧に調整される。 平面形は、ほぼ円形を呈す。	L-10グリッド 第①層(0/20)
第21図 15 図版16の15	瓦	胴部	ほぼ完	6.2 6.0 1.6 60.9	褐灰色 (7.5YR 5/1)	瓦の側端部を利用。 裏面に布目が明瞭に残る。 周辺部を打割整形する。表面に大きめの剝離が見られる。使用時のものかは不明。 平面形は、ほぼ円形を呈す。	L-10グリッド 第①層(40/60)

第12表　円盤状製品素材別出土一覧

素　　材	出土点数 (　)内は破損	平均値（単位：cm、g）	
		長径	重さ
磁器（中国産青花・本土産）	2	1.6	1.8
中国産褐釉陶器	1 (1)	—	—
沖縄産無釉陶器	8	3.8	23.2
沖縄産陶質土器	5 (2)	2.2	1.8
瓦	5 (2)	4.6	32.0
合　　計	21		

※(　)内の数は出土点数に含まれる。
※平均値は「破損」を除いた平均。



第13図　円盤状製品素材別出土状況

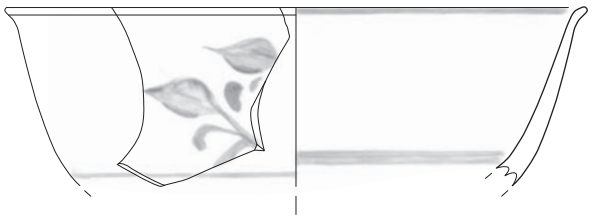
第13表　玉類・金属製品観察一覧

法量単位:cm、g

挿図番号 図版番号	種類	器種	完／破	長さ 厚さ 重量	形状・特徴など	出土地点
第22図　1 図版17の1	玉類	小玉	完形	－ － 0.35	石製と見られる資料。 磨面が見られ、平面形状は略三角形状。立面は楕円形となる。 色調は赤茶色を呈する。 長径:7mm、高さ:6mm、孔径:2mmを測る。	L-9グリッド 第①層(0/20)
第22図　2 図版17の2	金属製品	簪	破損	9.0 0.27 3.33	簪の屈曲した資料。 頭部の形状は「耳かき形」。竿部は二つに曲がっている。尻部は欠損し、磨耗している。頭部の幅は3.5mm。 竿部の断面形状は方形。残存の長さを延ばした場合約10.4cmとなる。	L-10グリッド (20/40)
第22図　3 図版17の3	金属製品	簪	完形	5.3 0.28 3.65	簪の屈曲した資料。 頭部の形状は「耳かき形」。頭部の幅は3.5mm。 竿部は曲がり、「コ」の字状となる。竿部の断面形は方形で、先端は尖る形状。長さを延ばした場合約8.5cmとなる。	L-10グリッド (20/40)
第22図　4 図版17の4	金属製品	銭貨	破損	－ － －	銭貨の約半分残存の資料。 錆や磨耗で文字は辛うじて、「寶」と「永」の一部が確認できるため「寛永通寶」と思われる。「寶」の文字の左上縁に欠けが見られる。裏面は磨耗で郭や縁の段が僅かに残るのみである。 推定外径:25mm、縁の厚み:1.2mm、郭の厚み:1.15mm、文字のある所:0.9mm、文字のない所:0.8mmである。	試掘point5
第22図　5 図版17の5	金属製品	銭貨	破損	－ － －	銭貨の約1/4残存の資料。 錆や磨耗で文字は判読不能。文字らしき所が僅かに盛り上がる。推定外径:30mm、縁の厚み:1mm、郭の厚み:1mm、文字のある所:1.05mm、文字のない所:0.7mmである。	L-10グリッド (20/40)

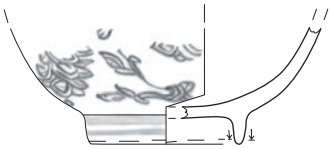
第14表　銭貨計測一覧

挿図番号 計測No.	銭貨名	初鋳年	書体	背　文	残存率	磁　力	法量（㎜・ｇ）				その他の計測値	出土地点
							外径	孔径	厚さ	重量		
第22図４ 計測No.１	○(永)○ 寶	江戸　1697	楷書	不明	1/2	無	推定 25.0	－	1.20	1.10	縁の厚み：1.2㎜ 郭の厚み：1.15㎜ 文字のある所：0.9㎜ 文字のない所：0.8㎜	試掘 point５
第22図５ 計測No.２	判読不能	－	－	不明	1/４	無	推定 30.0	－	1.10	1.00	縁の厚み：1.1㎜ 郭の厚み：1.0㎜ 文字のある所：1.05㎜ 文字のない所：0.7㎜	Ｌ－10 グリッド （20/40）

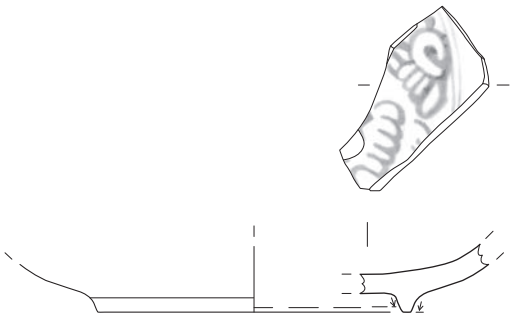


1

2

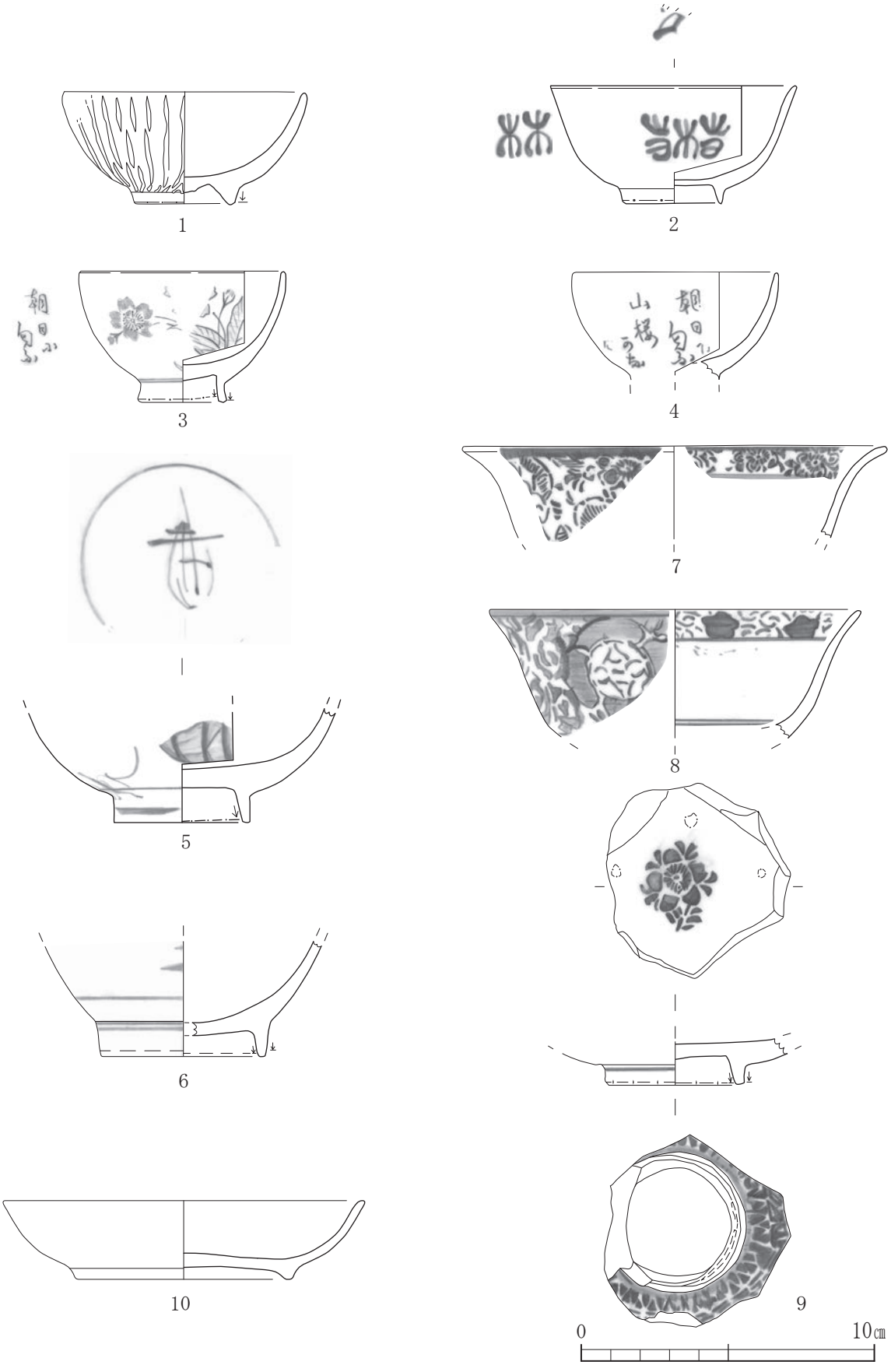


3

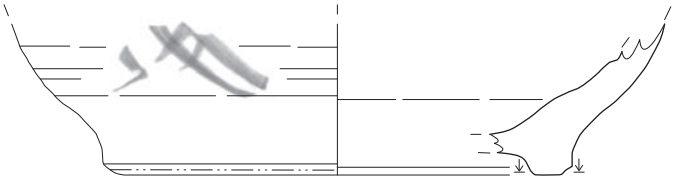


4

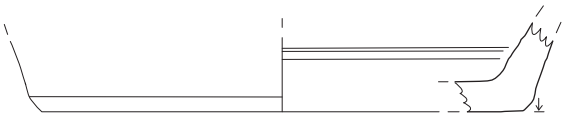
第14図（図版10） 中国産青花：碗・小碗・皿



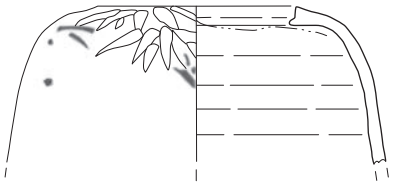
第15図（図版11）　本土産磁器：小碗・碗
本土産染付：碗
本土産白磁：皿



1

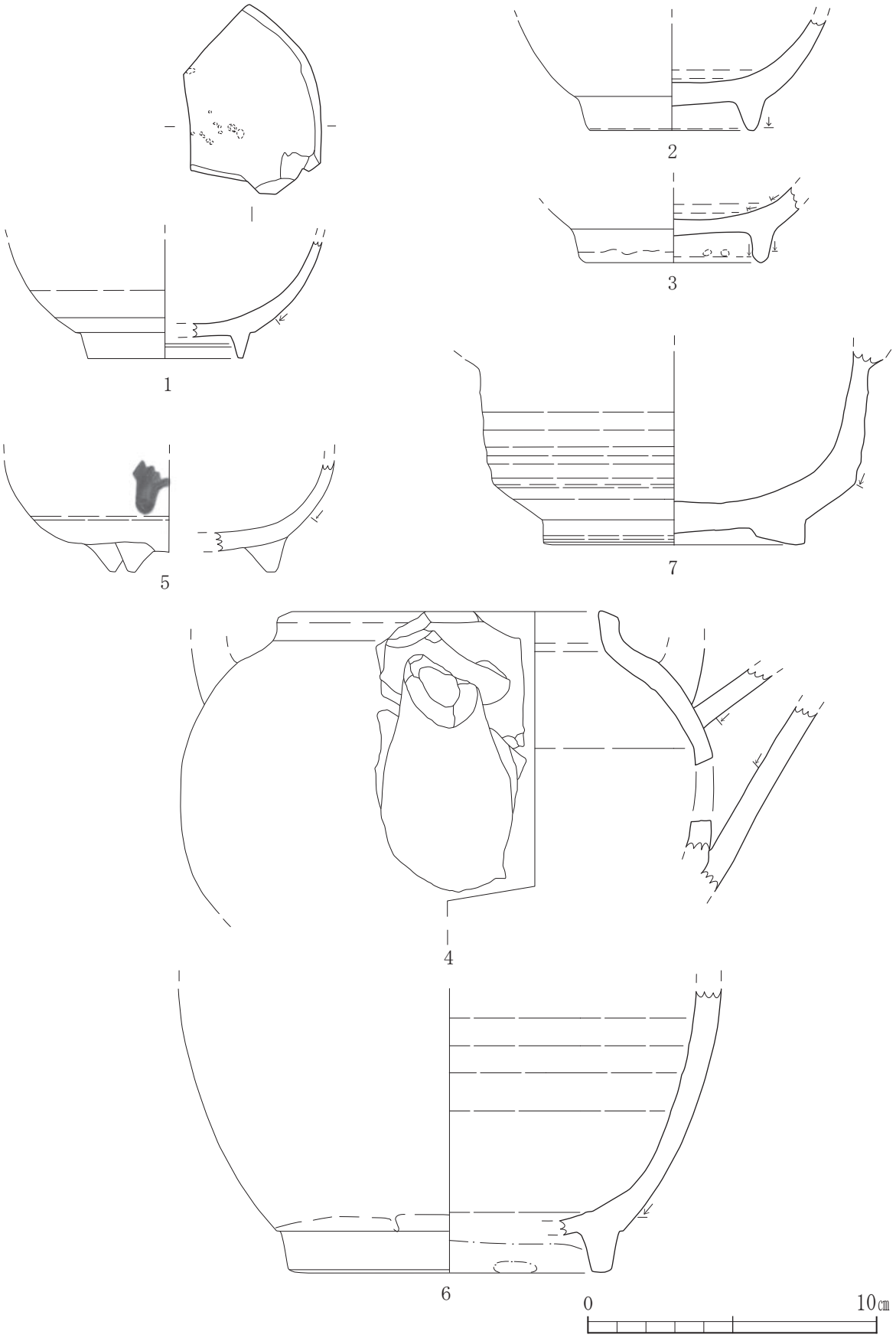


2

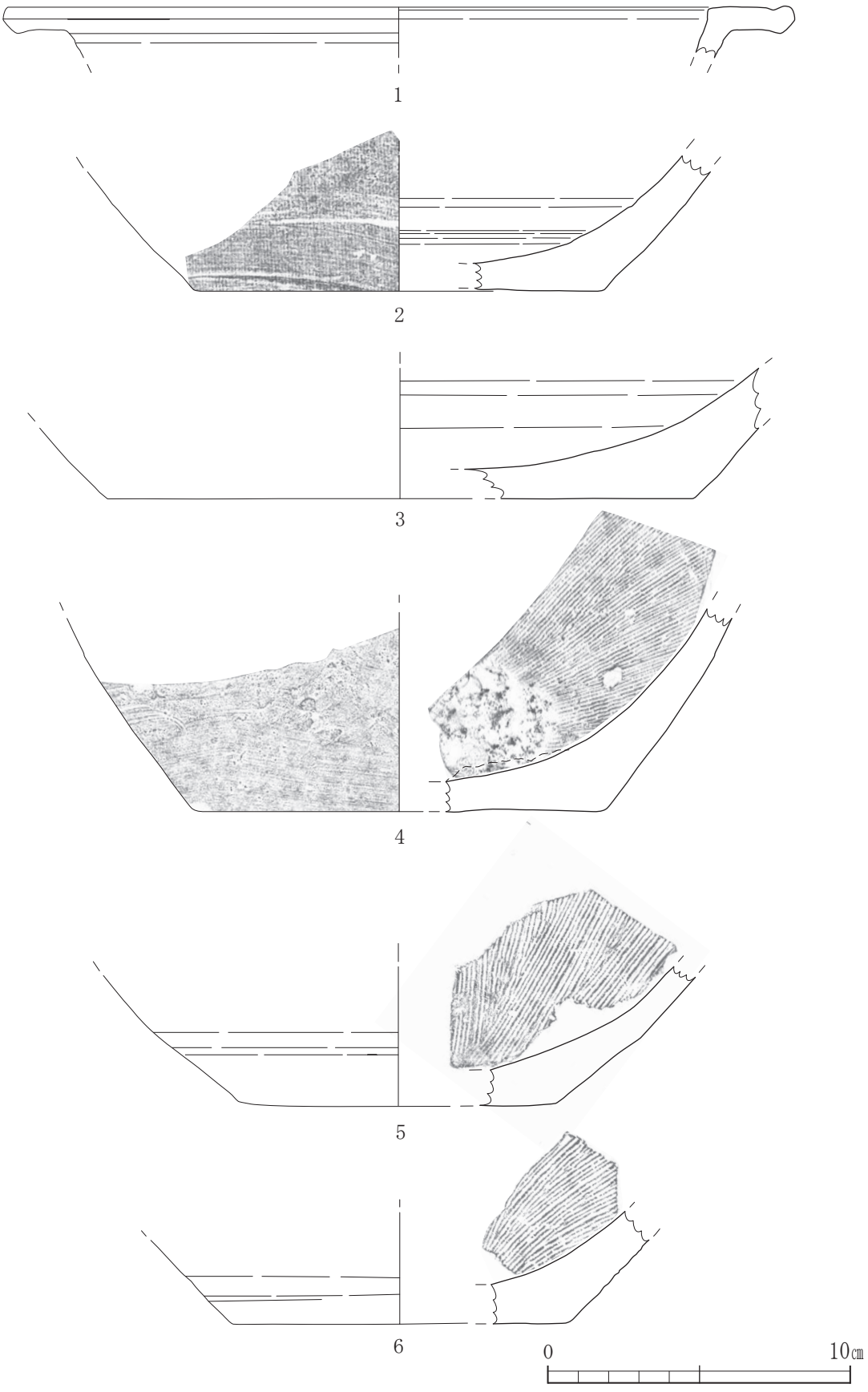


3

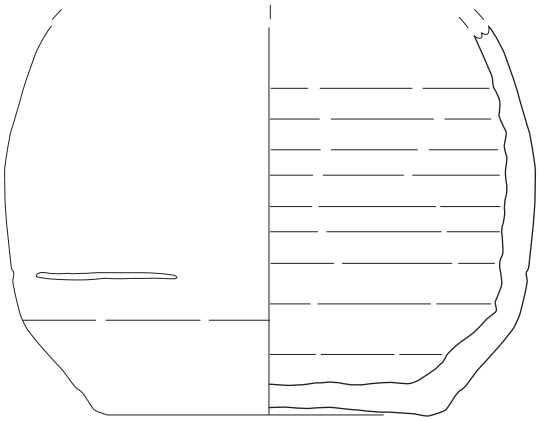
第16図（図版12） 本土産陶器：壺・急須



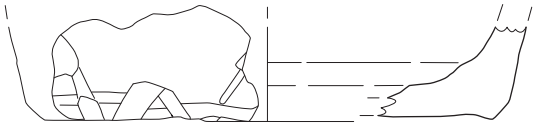
第17図（図版13）　沖縄産施釉陶器：碗・急須・壺・火炉



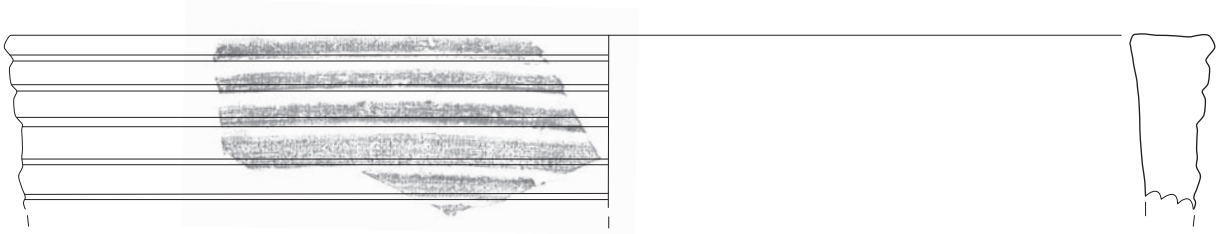
第18図（図版14）　沖縄産無釉陶器①：鉢・擂鉢



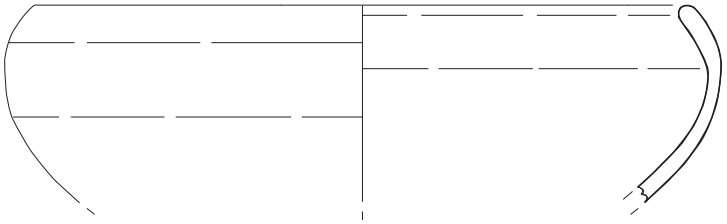
1



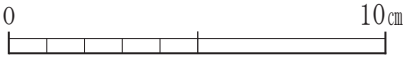
2



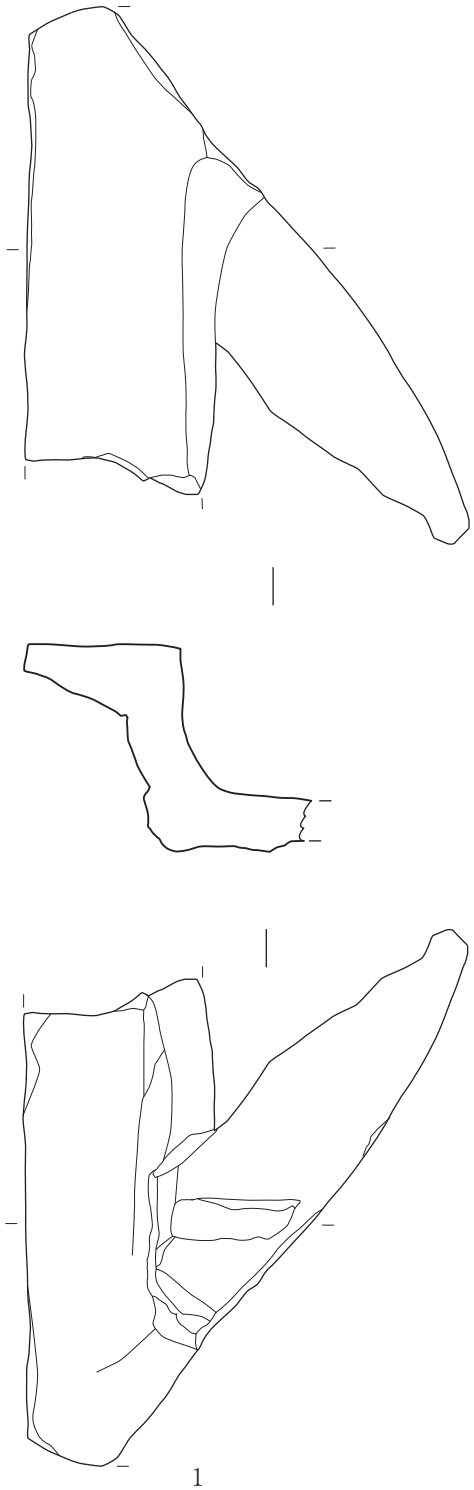
3



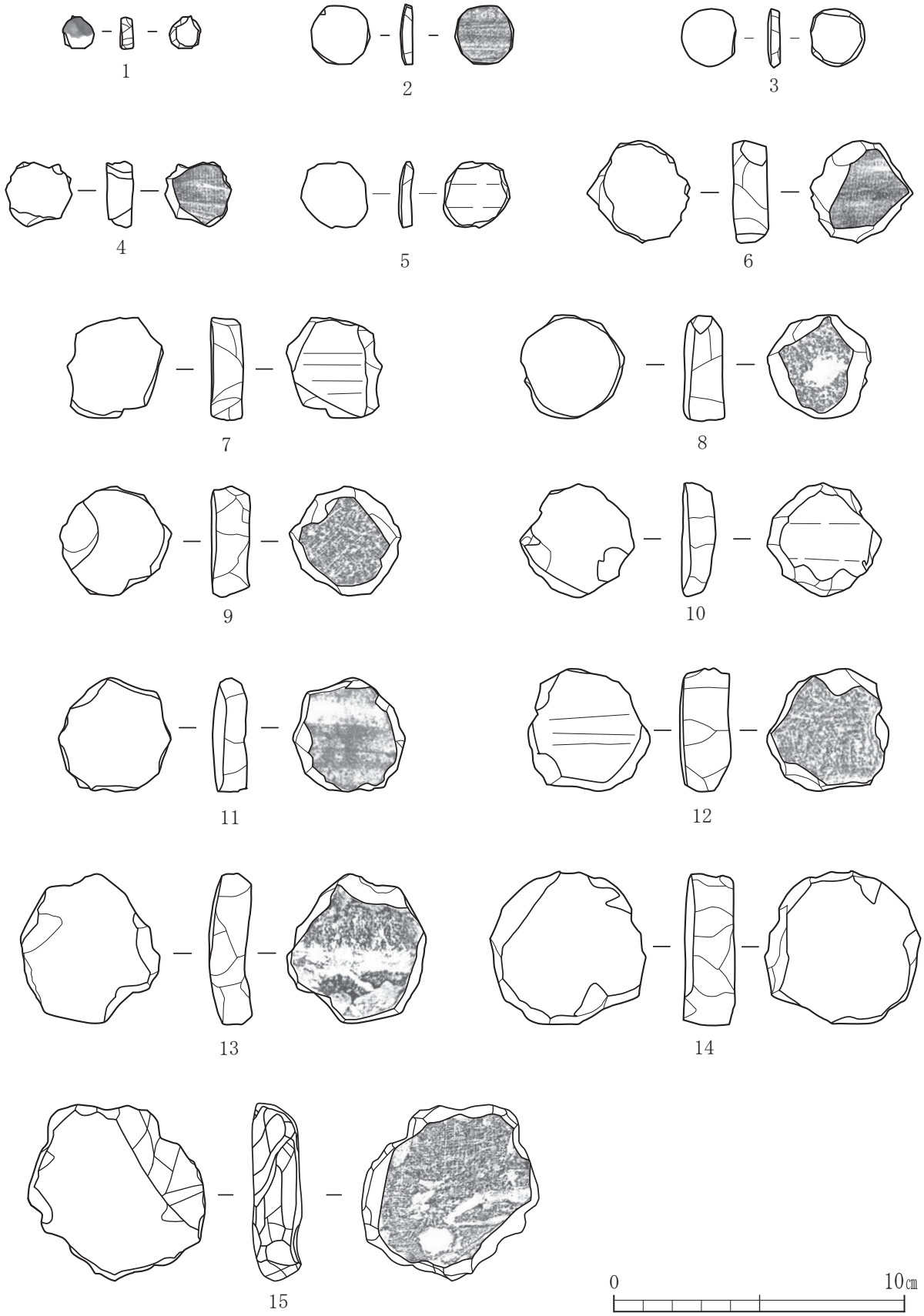
4



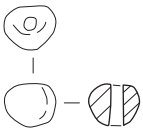
第19図（図版15）　沖縄産無釉陶器②: 壺・甕　　陶質土器：鉢



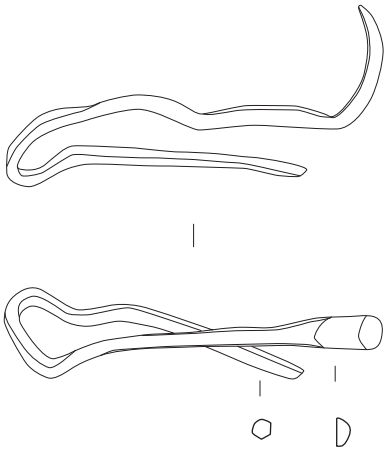
第20図（図版15）　瓦質土器：炉



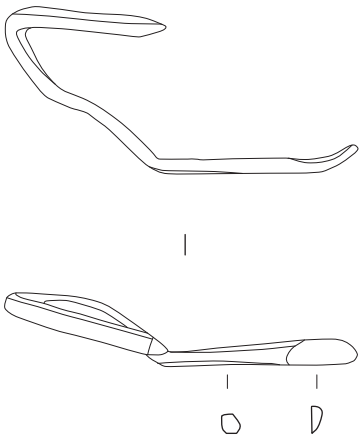
第21図（図版16）　円盤状製品



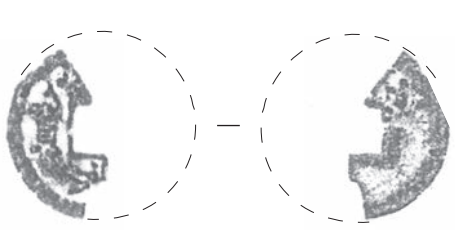
1



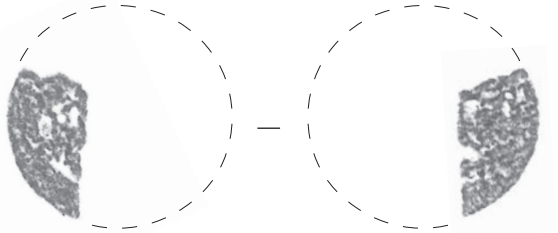
2



3



4



5

0　5cm

第22図（図版17）　玉類：小玉　　金属製品：簪・銭貨

第Ⅶ章　まとめ

前章までに、今回の調査成果について述べた。第Ⅰ章でも述べたとおり、調査の契機は、那覇市首里金城町３丁目地内における個人住宅建築に伴うものであった。ここでは、今一度その成果を踏まえてまとめとしたい。

沖縄県那覇市首里金城町は、世界遺産「首里城」「園比屋武御嶽」「玉陵」が所在する首里台地の南側斜面に位置し、その南下には安里川（金城川）が流れる。沖縄県指定史跡・名勝「首里金城町石畳道」が有数の観光地として知られる風光明媚な佇まいの地域である。

今回の調査区は、18 世紀初頭に描かれたとされる『首里古地図』の「内金城村」に位置する。内金城村は、士族等の屋敷と考えられる表記や（内金城）御嶽・寺院などが所在する。

那覇市教育委員会等（那覇市、沖縄県立埋蔵文化財センター）による過去の発掘調査の成果としては、本調査 12 件が実施され報告されている（第４図参照　10 件の報告書）。その他、公共・民間・個人等の開発に伴う試掘調査や現在調査継続中（資料整理中）などの調査区が幾つか所在する。

今回の調査では、層序を大きく四枚に大別した（第 11 図）。現代の造成土である表土層と最下層の地山（赤土：島尻マージ）との間に遺物包含層が堆積する。暗褐色及び黒色を呈する土層を第①層として本遺跡の遺物包含層とした。層厚 20 ㎝程度で、出土遺物は、中国産青花・青磁等から近代遺物までが層序内で一括して得られる傾向にあった。なお、その上部に薄く堆積し、色調がやや明るい層序を第①層上部として分層した。

今回の調査で確認された遺構は、ピット・溝状遺構・耕具痕（鍬跡・耕作痕）・礫集中遺構であった（第 12 図　図版６～９）。標高約 67m付近で遺構が確認されている。調査区の北東側（標高約 67.3m）から南西側（標高約 67.0m）にかけて、やや傾斜する。その地形に沿って延びる溝状遺構の縁辺部に耕具痕が集中し、ピットが散在する。やや離れて礫集中遺構が位置する。確認された遺構については、住宅基礎の下に保存されることとなった。

出土遺物は、全体的に小片で得られており、攪乱が著しいことを示すものと見られた。確認された遺構と合わせて、本調査区の性格の一端を示すものと考えられる。

中国産陶磁器は、青花を中心に褐釉陶器、青磁、白磁等が得られている。青花は、17～19 世紀代の資料が多くを占めるものと見られる。褐釉陶器及び青磁の多くは、15・16 世紀代の資料であろう。

本土産陶磁器は、クロム青磁・型紙刷りなどの近代産が多くを占めた。その中で、第 15 図３・４に記されている銘は、本居宣長の「しき嶋のやまとごゝろを人とはゞ朝日にゝほふ山ざくら花」（敷島の歌）であろう。その他、近世期の肥前磁器を染付として集計した（７点）。また、陶器として集計した資料の中には、薩摩焼と見られるものもある。

沖縄産陶器の瓦質土器として第 20 図に示したものは、残存の形状などから「馬蹄形焜炉」の可能性が考えられる。類似資料として、首里城跡や天界寺跡で出土している。

第 22 図１に示した小玉は、石製と見られるが具体的な材質の同定は行っていない。１点のみの出土であり、注意される。

今回の調査成果（生産遺跡を示唆する遺構の確認と 18 世紀前後を示す遺物出土状況）と文献資料（第８～10 図の首里古地図・第７図の戦前の金城町民俗地図）等に基づき、調査区の性格を推測すると、

「近代以降の生産（畑）の場」や「琉球王国時代に任命された高あむしられの屋敷跡及び畑地」などの解釈が想起される。これらのことから、琉球王府時代に成立した『首里古地図』に記された「高あむしられ」の屋敷跡が、近代になって廃絶し、敷地全体が畑地となり、現在の住宅地として変遷していく過程がうかがえる。これまで実施された周辺の発掘調査成果として、隣接する北側の調査区（主要な出土遺物から少なくとも16世紀を想定）では、「地山が北側へ傾斜し落ちこんで深くなっていくという状況は不明であるが、土坑などの遺構あるいは自然流路が存在している可能性」や「遺物包含層である第６～８層の堆積でもってほぼ水平となっており、これに付随してピット１・２が作られている。このことから、地山を第７層土で造成あるいは造成の過程でフラットに整地しそこへ柱を伴う何らかの構造物を作った」と推測している（参考文献９）。さらに、南側に隣接する調査区では、「内金城嶽道となる石畳道は、18世紀末から19世紀末までの約百年の間に敷設されたものと、ここでは想定しておきたい」との報告がなされている（参考文献８）。本調査区を解釈する上で貴重な参考資料である。

最後に、これまでに実施された各調査区の調査成果を踏まえ、それらを面的に考察し、文献資料と合わせて遺跡の立地・確認遺構・出土遺物の在り方を捉え直すことにより、「首里旧金城村跡」の総合的な解釈の一端を提言していくことが重要である。今後、改めて各調査区における成果について整理をしていきたい。

【参考文献（１～10は第４図対応)】

１．那覇市文化財調査報告書　第46集　『首里旧金城村跡』　那覇市教育委員会　2000年３月

２．那覇市文化財調査報告書　第48集　『首里旧金城村跡』　那覇市教育委員会　2001年３月

３．那覇市文化財調査報告書　第68集　『首里旧真和志村跡(首里旧真和志村跡　首里旧金城村跡)』
那覇市教育委員会　2005年３月

４．『首里旧金城村跡』那覇市教育委員会　2007年５月

５．那覇市文化財調査報告書　第81集　『首里旧金城村跡』　那覇市教育委員会　2010年３月

６．那覇市文化財調査報告書　第80集　『那覇市内遺跡Ⅱ　－首里金城村跡－』　那覇市教育委員会　2009年３月

７．那覇市文化財調査報告書　第82集　『那覇市内遺跡Ⅲ　－首里旧金城村跡－　－首里旧真和志村跡－』
那覇市教育委員会　2010年３月

８．那覇市文化財調査報告書　第79集　『首里内金城村跡石畳道』　那覇市教育委員会　2009（平成21）年２月

９．那覇市文化財調査報告書　第106集　『那覇市内遺跡Ⅶ－首里旧金城村跡－　－御茶屋御殿跡－』
那覇市　2018（平成30）年２月

10．沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第26集　『ナカンダカリヤマの古墓群』
沖縄県埋蔵文化財センター　2005（平成17）年３月

・沖縄考古学会　2018（平成30）年度研究発表会資料集　『古都首里を掘る』　沖縄考古学会　2018（平成30）年７月８日

・公益財団法人鈴屋遺蹟保存会　本居宣長記念館のホームページによると、「しき嶋のやまとごゝろを人とはゞ朝日にゝほふ山ざくら花」は、「日本人である私の心とは、朝日に照り輝く山桜の美しさを知る、その麗しさに感動する、そのような心です。」と紹介されている。

・沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第２集　『天界寺跡（Ⅰ)』　沖縄県立埋蔵文化財センター　平成13（2001）年３月

・沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第77集　『首里城跡　－銭蔵地区発掘調査報告書－』
沖縄県埋蔵文化財センター　平成27（2015）年３月

図　　版

図版 1　遺跡一帯の空中写真（2009 年撮影）

図版２　調査区の遠景と近隣（首里金城町石畳道）の状況

１段目左：遠景（南側から）　　１段目右：遠景（南側から）
２段目左：石畳道（北側から）　　２段目右：石畳道（北側から）
３段目左：石畳道（北側から）　　３段目右：石畳道（南側から）
４段目左：近隣の状況（西側から）　　４段目右：近隣の状況（東側から）

図版３　表土剝ぎ作業の状況

１段目左：作業状況　　１段目右：作業状況

２段目左：作業状況　　２段目右：作業状況

３段目左：作業完了　　３段目右：作業完了

４段目左：作業完了　　４段目右：作業完了

図版４　調査状況と調査区全景

１段目左：発掘調査状況
２段目左：調査区全景（西側から）
３段目左：調査区全景（東側から）
４段目左：埋戻作業状況

１段目右：発掘調査状況
２段目右：調査区全景（南側から）
３段目右：調査区全景（北側から）
４段目右：埋戻作業状況

図版５　図面作成作業状況

１段目左：調査区平面図作成作業状況
１段目右：調査区平面図作成作業状況
２段目左：層序図作成作業状況
２段目右：層序図作成作業状況
３段目左：遺構平面図作成作業状況
３段目右：遺構平面図作成作業状況
４段目左：遺構平面図作成作業状況
４段目右：遺構断面図作成作業状況

図版６　K－９・10 グリッド

１段目左：グリッド全景（東側から）
２段目左：遺構検出状況（北側から）
３段目左：Pit５半裁状況（北側から）
４段目左：層序と礫集中遺構半裁状況（北側から）

１段目右：遺物出土状況
２段目右：層序と Pit 半裁状況（北側から）
３段目右：礫集中遺構半裁状況（東側から）
４段目右：礫集中遺構半裁状況（東側から）

図版７　K-11 グリッド

１段目左：精査作業状況（南側から）　　１段目右：遺物出土状況
２段目左：遺構検出状況（西側から）　　２段目右：遺構検出状況（西側から）
３段目左：層序と遺構検出状況（南側から）　３段目右：層序と遺構検出状況（南側から）
４段目左：遺構検出状況（東側から）　　４段目右：遺構検出状況（東側から）

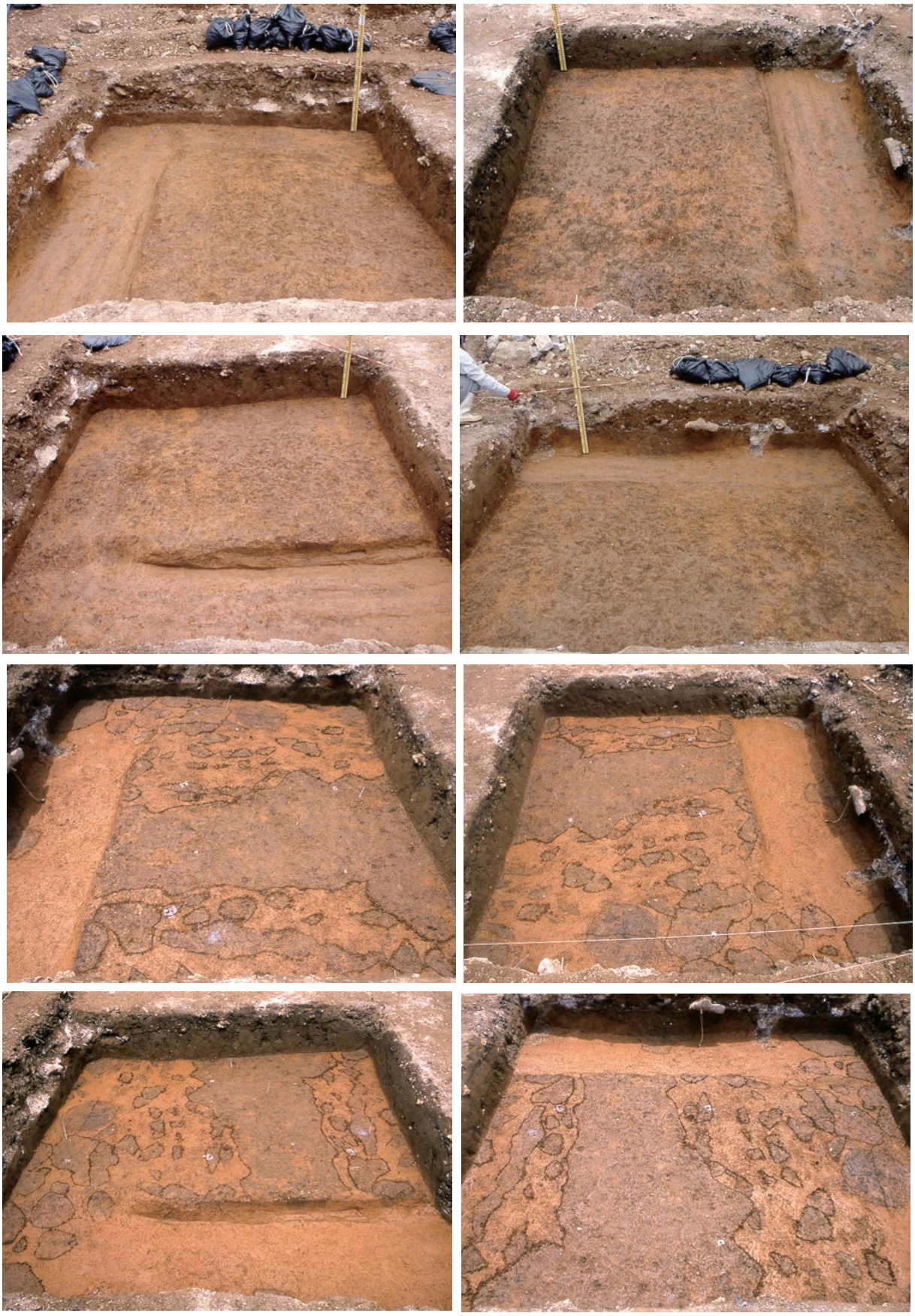
図版８　L－９・10 グリッド

１段目左：グリッド全景（北側から）　　１段目右：グリッド全景（西側から）

２段目左：層序（西側から）　　２段目右：層序（北側）

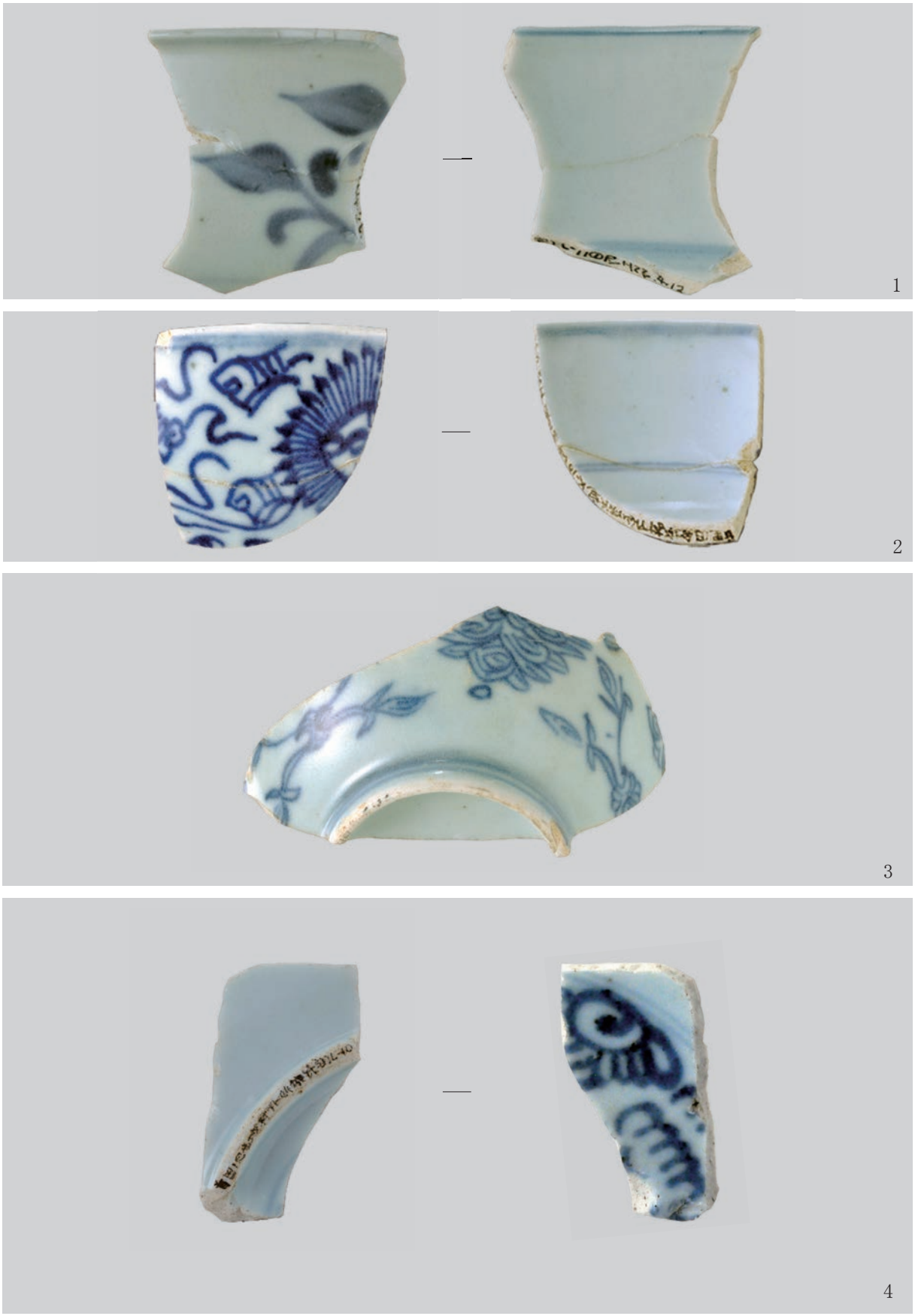
３段目左：Pit６検出状況（西側から）　　３段目右：Pit６半裁状況（北側から）

４段目左：Pit１・２半裁状況（南西側から）　　４段目右：遺構検出状況（西側から）

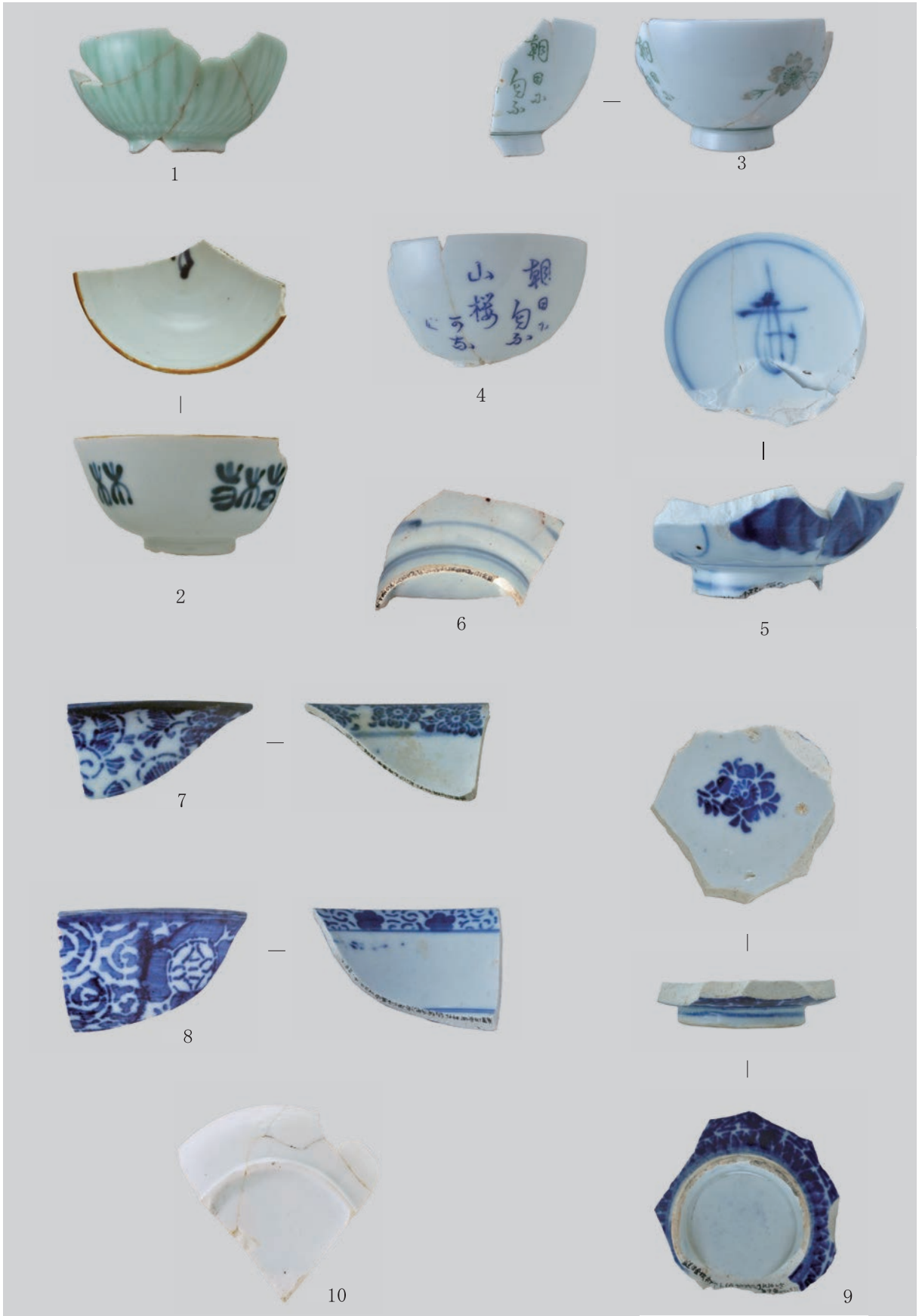


図版９　L-11 グリッド

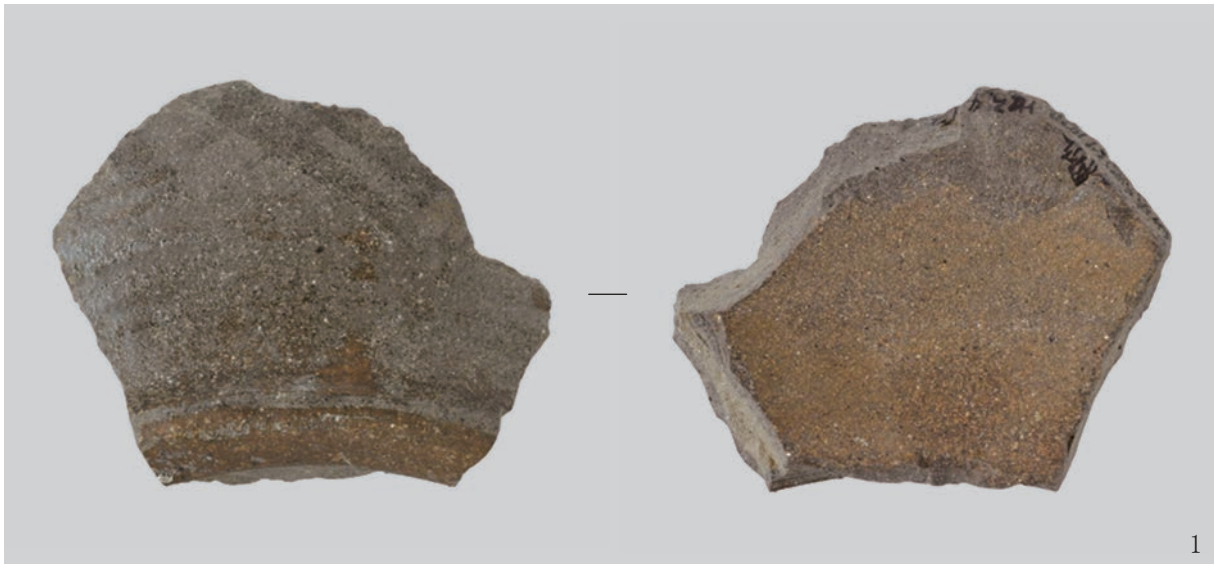
１段目左：層序と遺構検出状況（北側から）　１段目右：層序と遺構検出状況（南側から）
２段目左：層序と遺構検出状況（東側から）　２段目右：層序と遺構検出状況（西側から）
３段目左：遺構検出状況（北側から）　３段目右：層序と遺構検出状況（南側から）
４段目左：遺構検出状況（東側から）　４段目右：遺構検出状況（西側から）

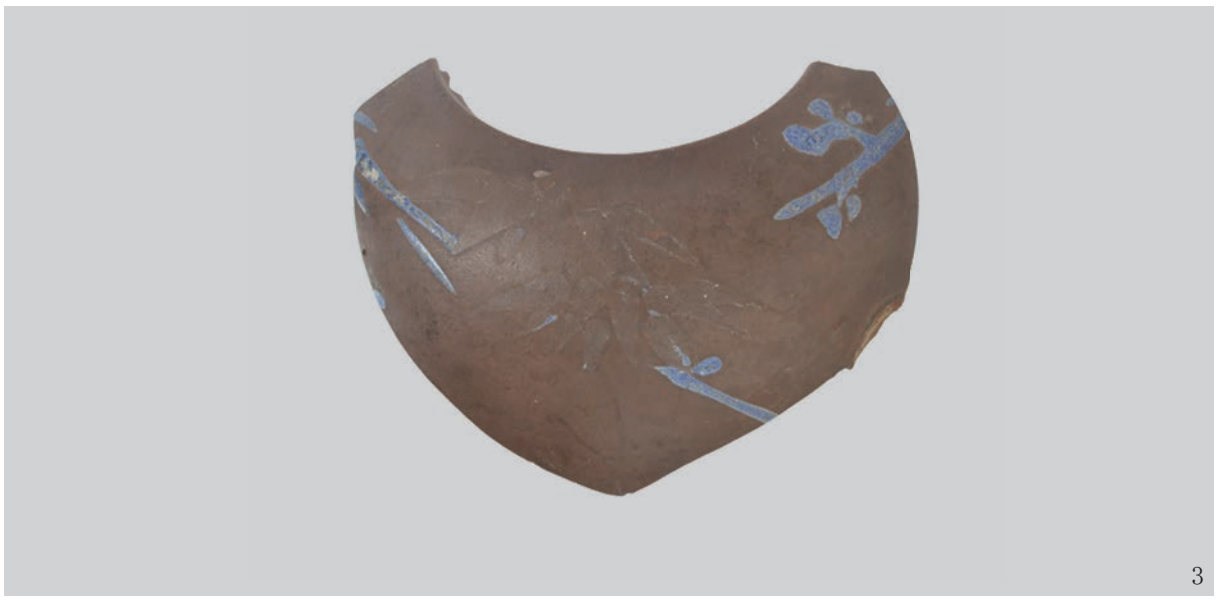


図版 10 （第14図） 中国産青花：碗・小碗・皿



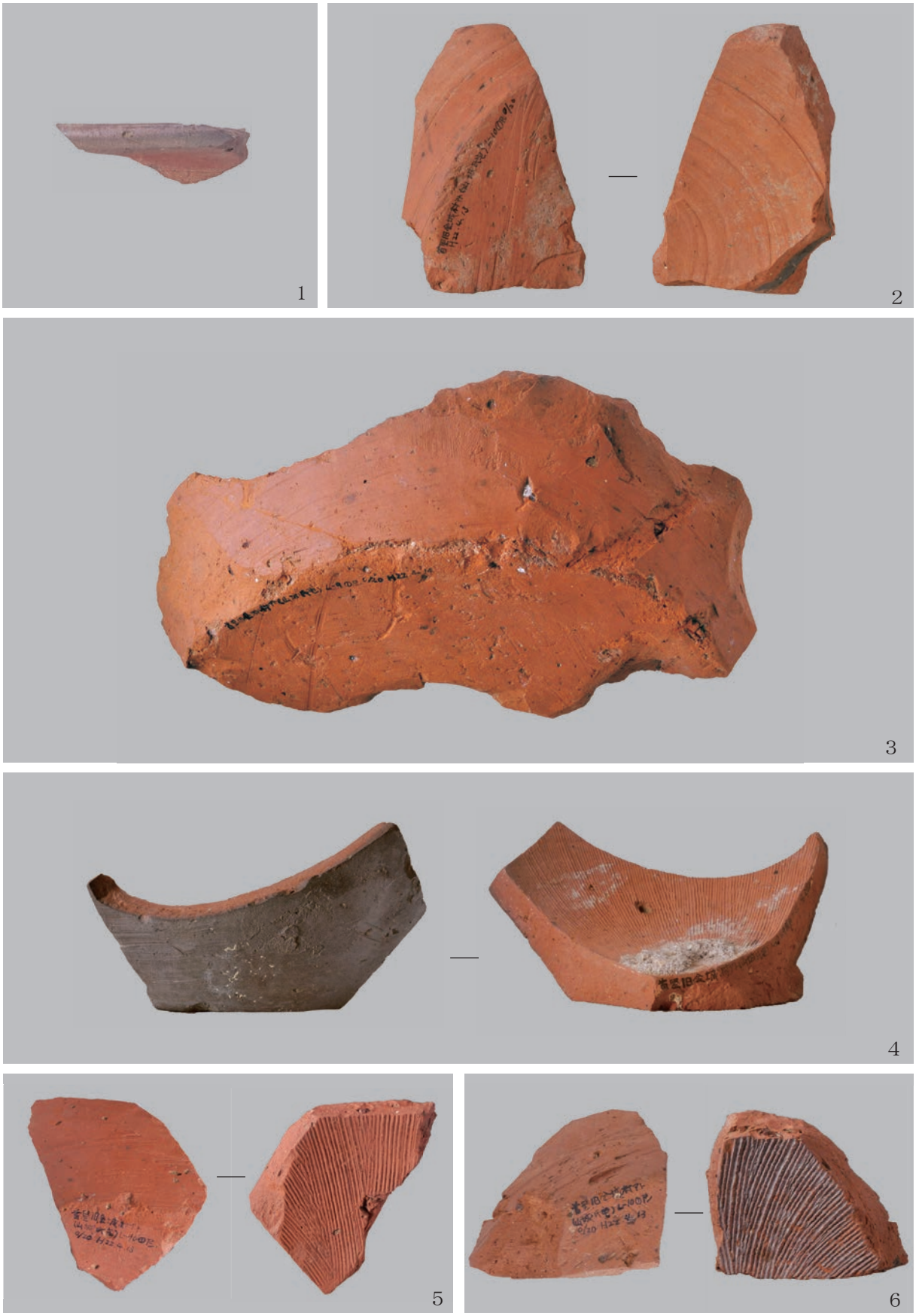
図版11（第15図）　本土産磁器：小碗・碗
本土産染付：碗
本土産白磁：皿





図版12（第16図）　本土産陶器：壺・急須

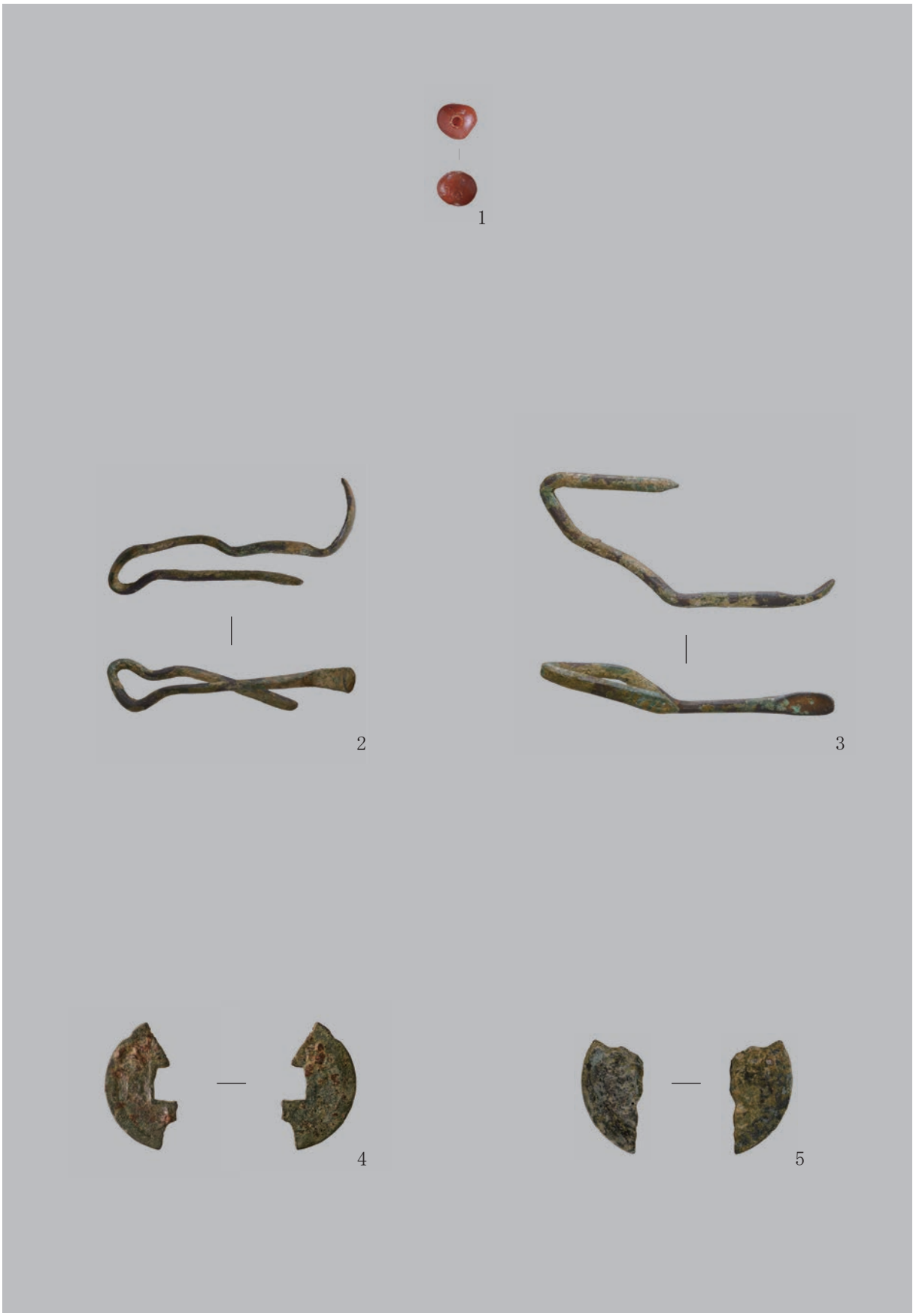
図版13（第17図）　沖縄産施釉陶器：碗・急須・壺・火炉



図版14（第18図）　沖縄産無釉陶器①：鉢・擂鉢

図版15（第19図）　沖縄産無釉陶器②：壺・甕　　陶質土器：鉢
（第20図）　瓦質土器：炉

図版16（第21図）　円盤状製品



図版17（第22図）　玉類：小玉　　金属製品：簪・銭貨

報 告 書 抄 録

ふりがな 書名	なはしないいせき 那覇市内遺跡Ⅷ
副書名	首里旧金城村跡
巻次	
シリーズ名	那覇市文化財調査報告書
シリーズ番号	第110集
編著者名	仲宗根啓
編集機関	那覇市　文化財課
所在地	〒900-8585　沖縄県那覇市泉崎1－1－1　℡098-917-3501
発行年月日	西暦　2019年　3月　22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
なはしないいせき 那覇市内遺跡Ⅷ	おきなわけん 沖縄県 なはし 那覇市 しゅりきんじょうちょう 首里金城町	47201		26度 12分 56秒 （世界測地系） （第ⅩⅤ系）	127度 42分 57秒 （世界測地系） （第ⅩⅤ系）	20100412 ～ 20100423	約48㎡	個人住宅 建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
那覇市内遺跡Ⅷ	集落跡	グスク時代 ～ 沖縄近世・近代	ピット群 溝状遺構 耕具痕 礫集中遺構	青花 本土産陶磁器 沖縄産陶器 円盤状製品 玉類 簪 銭貨	生産遺跡に関連すると考えられる耕具痕等の検出

要約	今回の調査は、個人住宅建築に伴う「首里旧金城村跡」の緊急発掘調査である。調査によって、生産遺跡に関連すると考えられる耕具痕・溝状遺構・礫集中遺構やピットなどが確認されたことは貴重な成果となった。遺物包含層として捉えた第①層から、中国産青花、本土産陶磁器、沖縄産陶器、円盤状製品、簪、玉類、銭貨など多種多様な遺物が得られている。なお、今回の調査区においては、住宅建築前の調整によって、地山直上に確認された遺構が保存できた。

那覇市文化財調査報告書第 110 集

那覇市内遺跡Ⅷ

―首里旧金城村跡―

発行　2019（平成 31）年３月 22 日
那覇市
〒900-8585　沖縄県那覇市泉崎 1-1-1
編集　那覇市　市民文化部　文化財課
TEL　098-917-3501
FAX　098-917-3523
印刷　有限会社　アイドマ印刷
〒902-0073　沖縄県那覇市字上間 244（3F）
TEL　098-833-1122